

以て限らざれば、之を譯するに當り、彼の一句を其儘此の一句に譯すること能はず、従ひて往々句の中央より切斷せざるを得ざることあり（下略）

これに對しても篁村は次の如く一言してゐる。

日本の文章不規則なるには相違なきも、句點の限界なきにはあらず、殊に草双紙類は之を省きて用ゐざりしを例とし、人と人との對話の如きも一種のクォーティション、マーク印を「用ゐて甲乙を區別するに過ぎざればダラ／＼と連續の長句と思はれしも無理にはあらず。

と篁村は僕が前に記した會話の件のやうな事を言つてゐるが、外人がここで言はうとしたところはそれもあるであらうが文章の接續の縷々とし、つづいて妮々たるを言つてゐるのではないだらうか。立體的に關係代名詞などで合理的につながらないで、あとへあとへさなだ蟲のやうにつづくのに降參したのではないたらうか、さうありさうな事に推察する。篁村がこの點に氣づかずに對話の事を言ひ出してゐるのは前の「一一の名前を掲ぐるの煩はしきを避けておの

づから主客の判別あるを」云々のつゞきを考へてゐたらしい。さうして篁村がそれを言ひ出した時は澳人が「日本の文章はその形に富むに拘はらず」數も性も人稱も區別がなく時も判然しないといふあたりからもう外人の意を十分會得し得ないで簡単に對話の主客の多く省かれてゐる事の不満とだけ受取つたのではあるまいかと疑はれてくる。ラテン語の如くといふ折角の引例がわからないからであらうが前記引用中の○○を施したあたりは僕にも實は全く見當もつかぬ。従つて全體が呑み込み兼ねる結果、もしや前記引用の譯文に誤がありはしないかとも疑つてみる。ラテン語の事は識者の高教を待つとして、日本語に數も性も人稱も時もなく主格は殆んど文字には現はされないのも事實で、外人がこれを怪しむのも無理はあるまい。「日本の文章は其の形に富むに拘はらずといふのは日本文の形態の變化に富む——といふよりは構造の上から語の順序に一定の法のない放縱を難じてゐるものと解し、且つ第二段では、先づ嚴格な句點——篁村の註の如く（例へばコンマ・セミコロン・ピリオードの類）の殆んど無く間々あつても氣

まぐれの如くにしか使はれない事と、更に、關係代名詞様のものが一向なくて絲をひくやうなひきのばし一方で、のびたものもとへば絲を疊の上にはうり出したやうに平面的でとりとめのないのに閉口したのであればまいか、と推察する。これならば當然ありさうな事だからである。由來テニヲハといふものは日本文の神秘とも言ふべきものであらう。殆んどどこへどうにでもつながる。關係代名詞のやうなもの一つも發生しないわけである。さうして形態の放縱もやがてここから生れるのであらう。さうしてこれも亦日本文日本語の特色で美點だと僕は考へてゐる。このテニヲハの精神が文章の全局の精神となつて各の部分がそれぞれお互によろしく接續したり照應したりして文章が讀者を支配するより讀者の読み方が文章を支配して文章が見方によつてはさまざまに見える大柄の友禪模様などのやうな趣を呈する。また譬へば波のまにまに漂ふてゐる海月のやうな様子でもある。書いた人の文章であると殆んど同じぐらゐる讀む人の文章でもある。含蓄が多いと言へないこともあるまいが、あやふやなと難ぜられまいもの

でも無い。オパールのやうな美とは言へるであらう。神韻と幽玄とは自らにある。この漂ふやうな文章の姿は何から發生したかは知らないが、とにかく異色のあるものであらう。これを美しいとして尊重する事も出来ようが、困つた澁體として排する人があつても尤もである。

### 三 句讀點の問題

前項の外人の觀察のなかにも句讀點の少いことがあつた。その種類も無論少い。句と讀とだけであるが、それすらあまり用ゐてゐないのではあるまいか。前項篁村の説では「草双紙はこれを省きて用ゐざるを例とし」とあるが、さればと言つて草双紙以外でもさう盛んに用ゐて居ようとも思へぬ。本來今日のやうな意味の句讀點が日本文にあつたかどうかを僕は今尙知らない。歌ひ物の調子を重んずるための記號のやうな意味の、或は評釋家が後進の解釋の便宜のためにこれを附したことはあらう。僕のいふ意味は作者自身が、上の意味を嚴格に自覺して、句讀點

を文字同様の資格で稿者自ら取扱つた事を問題としてゐるのである。或は漢文の読み下しのために假名雜り文の發生したと同時に出來たのではあるまいか。もしさうだとすればそれは純然たる日本文から發生したのではなく一種の翻譯體から出たと言へよう。さうしてこれ亦一種の翻譯體全盛の近代になつて日本文の句讀が習慣にならうとしてゐるのではあるまいか。自分がかういふ考へを持つやうになつたのは近年、自己流の言文一致「喋るやうに書く」をやりはじめるに及んで、句讀の點の打ちどころに迷ふた末に、結局なるべくこれを少くする方針にしまつた。極く少く、時たま思ひ出したやうに打つのでさへ、讀者の便宜を思ふのと時代の習慣に従つてやむなくやつてゐることで、それにも別段嚴密な方針はなく、實はまづ氣まぐれに近い。是非とも書かなければならないほどの重要な句讀點にはめつたに出會さない。これを難ずる編輯者などがある場合には適宜に筆を加へて貰ふことに一任して大して遺憾をも感じない。をこがましく自分を語つてから引き合ひに出すので氣がさすが、前に引用の篁村の文を見ても

句讀點が今日の普通のものより少ないのが目に立つであらう。假名遣ひ漢字制限などに卓見を示した森鷗外が句讀點に關して慮を盡さない筈はない。事實韻文及び散文に於ける句讀を問題にしてゐる。皆短文ではあるが「韻文と句讀」「散文及び韻文の句讀」「句讀のいろいろ」と三度この問題を考へてゐる。みな明治二十年代の後半期であらう。時代の先達がこれを問題としたのは新文章がやや形を具へはじめたこの時代の苦慮がここに現れたものとも考へられる。明かに外國文の影響によつて盛んに用ゐられはじめ、それでも、せいぜいあるのは——と！、？、ぐらゐであつたものだけでも、新文明に取りのこされた白眼の綠雨をして「機械入り」と冷嘲せしめ、彼自身その創始者の雄であつた鷗外をして三考せしめた句讀點といふものが、その後一向問題にはならなかつたとは言ふものの日本文字のなかにあつてただ目ざはりばかりでなく實は消化し切れないうで残つてゐたのではあるまいか。本來便利のための借り物で、日本語の語感からは不自然な代物であつたのではあるまいか。理智主義の文學の棟梁と見なされた

芥川龍之介は谷崎に言はせると小うるさいばかりに神経質に句讀點を用ゐてゐた。その可否は別として日本語を理智的に使ふためには當然の方法であつたらう。それに反對した谷崎は近來では日本語には句讀は絶對にないのがいいといふ論で、そんなものがなくても句法をよくみれば自然にわかる。古典などの場合、もしそれが原本ならば無論寫本にしても、墨色なり段名の字體などによつて文章の段落は明瞭であらう。この意味で今日の活字にも、もつと變體假名を使ひたいといふやうな説もあつた。それはそれとして、鷗外の句讀點に關する意見は

「散文の句讀は文法に據り、語脈に據る。韻語の句讀は詩律に據り、聲格に據る。」

といふ、意見である。これは鐵案だと思へるのに、韻文に就てはなほ疑義があつたと見えて「句讀のいろいろ」がある。これによると「散文の句法は文法上より切る習ひなれば、其意義の斷續とことごとく吻合するものなれども、韻語のに至りては詩律上よりも切らるべく、文法上よりも切らるべくして、此の二種の句讀は一致することあり、また相乖くことあるは人の知

るところなり。」とその實例を古歌に施して觀せてゐるが、彼が後年うた日記を著はすに及んでは、自家の所謂詩律上の句讀に従つて一句一句を句切つてその下に句讀を切る代りに只一字分の空白を置き遂に句讀は一つも用ゐないのを原則としてゐる。その散文にくらべて當然古典的な用語を重んじたものであつただけに、或は思案にあまつた末がこの案に出たものであらうか。ともあれ、その用意の程が窺はれる。韻文はそれとしても「散文の句讀は文法に據り、語脈に據る」は迷ふ餘地のないところである。それなのに僕がこの大先達の意見を無視して好んで苦しむのは文語ならばともかくも口語には據るべき文法のあるを知らず。語脈に従はうとするその整理に迷ふからである。もとより僕の不明、拙文の散漫に因るには相違ないが日本語と句讀點とは木に竹を接ぐやうな無理があるのであるまいか。もつと深く國語を國文を考へる時機が到來したら何人もこの瑣末な問題に思ひの外惱まされる日があるのではなからうか。前にその特色美しい點、或は弱點として述べた日本語と分析解剖描寫などの明確精緻を生命とし特

色とするインドヨーロッパ語族とは根底的に相容れないもの。決して以て吾が短を補ふべきでないのを、一時無分別に移入してしまつた「彼の長」の一つではないだらうか。この句讀點の問題はほんのその表面に目立つ一角で暗礁はもつと深く大きく横はつてゐるのだはなからうか。

#### 四 日本文法及び言文一致など

由來「日本文には西洋語にあるやうな文法などはないから」そんなものは眼中に置くことはないといふのが「文章讀本」著者の意見の概要であつたかと思ふ。細論の部分はもう忘れてしまつた。もし覺えてゐるのが間違ひでないとすると、これは谷崎にも似合はしからぬ暴論であらう。日本文には西洋流の文法はあるまい。一體最初から文法を具備した言葉といふものはそれが自然發生のものである限りは先づあるまい。てんでに勝手に活用したその習慣のなかから何か一定の法則を見つけ出して不完全ながらに文法はつくられ、作文者はともかく一應それを

重寶してその不完全な法則の基礎の上に工夫をする。それが更に複雑になつてしまつて前の法則で律し切れぬと氣がついて文法も更に變化し進歩して行く、これが長い年月の間に幾度も繰り返されるうちに相互にもみ合つて國語が洗練され開拓されるのではなからうか。最初は何もない、人がその近いことを知つて通る。次第に同じところを通る。そこに自づと道が開ける。もつと近いところを發見せず先づ道を破壊することは決して賢者のせぬところであらう。谷崎の言ふところはどうせめちやくちやだからめちやくちやにやつていいといふやうなもので一應は尤もだが、再應は果してどんなものか。日本語には當然西洋語のやうな文法はありさうもない。しかしその独自の文法もないものであらうか。現在なくとも、本質的にあり得ないものとは決めてしまへまい。それは僕には判らないがもしあるものならばそれも一とほりは明かにして置いて欲しい。ところが今日我我の興へられてゐる文法といふものはどうやら舶來種のやうに思へて無用の長物のやうな氣がするのである。谷崎のいふのも多分それであらう。本居

宣長の天爾遠波研究や富士谷成章の文の分析や語の接續などの研究も聞くが、その題目位よりは知らないながらに、それでも古人はさすがに國語を知つてゐたなあと思へる。それにしても今日勢を得てゐる國文法は蘭學に刺戟された長崎通詞の仕事の方でもなくチエンバレン教授あたりの流れを汲んで發達したのではないかしら。句讀點同様何やら行き届いてゐるくせに不便が多すぎるから谷崎の如き古典家はまるで無視してしまつていゝやうな氣がするのでもあらう。それにしても現在の國文典が完備したのが國語の危機に瀕してゐた明治時代であつてみればそれが直譯的產物でありさうな事であり、さうあつても時の勢で致し方もない。それにしても、國文の独自の文法といふやうなものは考へられないものだらうか。出来る事なら無論この方面からも出直して助勢を乞はねばなるまい。もう志してゐる學者もあるかも知れないのに寡聞で知らない。

明治時代を「國語の危機に瀕してゐた」といふのは形容の言葉でも何でもない。國語廢止英

語採用論が森有禮や高田早苗によつて唱へられてゐたのである。坪内逍遙も假名に代へて羅馬字を採用するのは國語を變じて英語にする前提として賛成の意があつたのは小説神髓に見えてゐた。是等の識者の急進的な論に對して國語の廢すべからざるを説いたのは何人であつたと思ふか。反つて一二の外人であつた。この事實によつてみれば明治時代に國語の命の親は外國人であつた。僕が指からはじまつて四肢を斬る虐殺振りを慨嘆したのは決して言ひ過ぎではなかつた。日本人と歐米人とにこれほどに思想のひらきがあつたればこそ外國崇拜の風潮の盛んであつたのも無理もないと思へる。さうして當時の外人は骨董的にかどうか、皆日本を愛してゐた。ここらの關係が妙にややつこしく、くすぐつたい。顯官や識者のこんな國語觀がやがて、標準語の選擇だの口語文典の編纂や方言の調査となつて現れたものであるが、この社會的形勢が口語文の發生を促した契機となつたと見るべきであらう。言文一致口語文は布衣の手でなつた。ところが方言も調査が完全に實をあげるよりは先に標準語のために撲滅又は自然淘汰され

てしまつたらしいし、口語文典とやらも未だに完成されたとの模様はついぞ拜見しない。こんな事でもごついてゐる間にも言葉と思想とは文明の高いところから低い方へ水の如く押し寄せて來て自然主義文學思想と同時に口語文が長足の進歩を遂げたのはめでたいが、同時に口語文はこの時思ひ掛けなく——否、寧ろ當然に(?)變質した——どう變質したかと、いふと言文一致口語文の看板に偽を生じて特異な新文章體の一種になつたのである。といふのは口語を素材としてゐるが翻譯或は誤譯によつて洗禮をうけた新文章となつた。言文一致どころか一般國民の口語とは似ても似つかぬ無關係なものになつてしまつた。この新奇に因る魅力がこの新文章に勢力を與へはしたが生活力の根強さにも缺けず、國民一般に共有し得る文章といふ意味とは全くうらはらな代物になつてしまつた。國語の傳統からは全く切り離され日常生活とは一向關係なく青年知識階級の一部といふ極く少數者の特殊な新文章と化してしまつた。全く口語文發達史上の一大異變である。こんな口語文ならば在來の文章語の方がまだしも國民一般的なもの

あつた。さうして言葉がそのまま文章になるどころか新文章がその魅力のために言葉のなかへ雜つて行くやうな逆作用をはじめた。「僕は人力車上の彼が通過するのを認めました」と日常會話のなかで話したのを當時僕は事實として經驗し現在も記憶の中に持つ次第である。ともあれ自然主義運動以後日本文は急角度で歐文脈に傾き一方無技巧の技巧で傳統的文章を退治ながら無技巧の技巧は新文章の技巧を恣にした。やがてこの新文章が日本の近代文學の文章の傳統となつて蔓つて今日に及んでゐるものである。これを思へば、一そ明治二十年代に思ひ切りよく國語を廢止して英語を採用した方が氣が利いてゐたかも知れない。支那文明と一緒に漢文の渡來した當時知識階級は一度全く男文字ばかりの時代を實現して後に再び蘇つた國語の力を思ひ、その後に鎌倉時代の國文が発生した史實に鑑みて、明治の一時期位は蟹文字ばかりの時代を現出させるのも反つて徹底してゐたかも知れないのである。さうして外人の注意などによらずに國人自身が母國語愛慕尊重の思想が自づと湧いた時、はじめてピチピチした日本文の更生が見

られたのかも知れない。その徹底をなしくづしにして今日鶴のやうに混亂した日本語の横行——これこそ蟹文字のお化けにふさはしいもの——の時代を今後いつまで年期を入れればいいことやら。これが當分今のまゝつづくやうなら、國語廢止英語採用が過去の笑話ではなく將來の事實で一度そこまで行つて來なければいしめくりのつかぬ事が生じなければよいがと思はれる。尤も外國語を國語とすることの不自然不見識位は識者ならずともさすがにもう常識にはなつたが漢字の代りに外國語の名詞や動詞を用ゐる假名の代りに羅馬字を用ゐて、日本式新世紀語或は世界的新日本語を創始してこれを諸外國に布かうといふやうな景氣のすばらしいのなとが出ないとも限らない。——さうなれば日本語は國內でも便利國外にも通じよう一石二鳥なとと賛成する向が出て來る。これは漫畫だが空想しただけでも寒心する。でも一切を處理する便利萬能の風潮や國語に對する當局及び一般の無理解はもうこの寒心の圖の一步手前あたりまで位は來てゐるやうな氣がする。否、極言すれば自然主義運動を出發とした現代の國文は漢字と假

名と日本の口語とで綴られた外國文學と看做すべきものであらう。日本語の表現が國際的に進歩したとか、日本民族が世界的に進出したとか祝賀すべきが至當であらうか。僕は漢字と假名と日本の口語とで日本文を書いてみたいといふまことにはかない希望を抱いてゐる。さうしてわき路へ外れて行つてしまつた言文一致を、ならうことならもう一度本筋にかへしてみたいものである。

## 五 喋るやうに書く説

——わが新言文一致論——

文章と言葉とはその相違の點を見ればそれぞれ別々のものには相違ないけれども同じといふ方面から見られない事はない。否、根幹は同じで言靈は筆で扱はれても口で扱はれてもよほど似てゐる。言葉の美德が文章の上の惡徳に變る場合はさう度々はあるまい。言文一致の口語文が變てこな方向へ發達してしまつたのを見た僕は、もう一ぺん口語から出發した文章を試み



ることが有意義だらうと考へて「喋るやうに書く」の説を抱いた。あらゆる書物のなかの言葉を出来るだけ捨てて、生活のなかに入り込んでゐる言葉だけを尊重しよう書物のなかの言葉も生活のなかへしみ入つて後にその素材とするの資格を認めようといふので眼から筆に現はれる言葉より、あらゆるところから入つて自然と口に出て來た言葉の方が國語の傳統に近いひびきにほひを帯びてゐるからといふのと直接に生活に即した言葉の方が言葉の生活力も旺盛だからといふやうなつもりであつた。喋るやうに書くといふ方法は文章論として正道でないといふ非難も考へられないではないが、こんなに文章道がこんがらがつてしまつた時にはこの奇道によつて文章をもつと生活に接近させるために出来るだけ言葉と同じにしてみたらといふのであつた。ところがその生活そのものが亂れてしまつてゐるので、言葉もだいぶんひどくなつてはゐる。ひどいながらにそれでも現に用も辨じ毎日國民全般によつて育てられてゐるところに強みがある。この流動する生長の力に文章を結びつけないと思つたのである。「喋るやうに書く」と

云ふのに對して芥川には「書くやうに喋る」といふ意見もある。これは僕の説では同じ事のつもりである。尠くもその理想である。ただ喋るやうに書くといふ方が「書くやうに」を先にするよりも原則的に國民の全階級を含むことが出るし、又生活とも密接に關聯させられるので「喋るやうに」の方を主にするのである。芥川 of 言葉は僕の言葉のそつくりうらがへしであるが理想的に言文の一致が出來たらこのうらもおもてもなくなつてしまふといふのが僕のつもりである。「喋るやうに」を主とする僕の説によれば言葉の取捨選擇は机上にはじめて行はれるのではなく生活の上で行はなければならない。日常生活のなかへ入り込んでゐる言葉を一切合切拒まない。もし拒むものがあるなら、それが單に筆にかゝる前に、耳なり頭なり心なりで拒否してゐなければならぬ。言文の極度の一致を目的とする新口語體の理想はそれ故、言の方から文に接する方面と文の方から言に行く面をも具へさせたい。やがて行（生活）とも一致するところへ行かせたいものである。そのした地は十分あるつもりである。「唯喋るやうに書け」とい

ふ文章道の易行門はその無法則で文章を更に混亂させることも事實であるが、その混亂は筆者各自の生活と人柄とを反映露出するといふ妙味があり、逆に文章の改善のためには直接生活と性格との改造にまで追ひつめられて行かなければならない程「行」と密接なところに主張としての力があるつもりである。悲しい事にはこの主張を實現していい方のお手本を示す力が筆者にはない。悪い見本なら今また一つ作つた。

紙もなくなつた。時間もすぎた。使は欠伸をしてゐる。勞れた頭は後にまはした肝要な部分を説き盡さなかつた憾が多いが。もう取りかへしがつかない。——(未定稿)——

## 伊奈佐保層江

等保都安布美伊奈佐保會江乃水乎久思は萬葉の卷十四以來知られてゐるが、自分は先年偶然その地に遊んでその景の美に心をひかれ古人が徒らに地名を謳はぬのを學んだ。同時に案内の友によつてこの地の歌一首を知り得た——

旅にして誰と語らん遠江引佐細江の春のあけぼの

歌は石川依平の詠である。依平は幕末の名家で遠州掛川の人であるから、旅にしてといつたところでせい／＼數日のものであつたに相違ない。詩人が常套の誇張的感傷の感もしないので

はない。それにしてもこの詠の美は境にのぞんで真に理解し得るであらう。

その平淡温雅な歌の趣と風景の趣とが真に一致してゐるのを見るからである。旅にして誰と語らんといふ程の甘美な感傷の幾分もある風景である。太古は外海に沿うた沙丘であつたらうかとも思はれて小丘の裾を浸す濱名の湖水は自ら小曲浦の連続で兼ねて長汀の趣もある。弓形をした長汀の弦は東南に當つて打開けてゐるから、春曉の静かな空が紅を水に映じたさまはさぞかしと思はれる。依平も恐らくは實境によつて得たものであらう。地形を見てこの感が深かつた。それはともかくとしても、面白いのは依平が歌の微妙なしらべである。

日本の詩歌の韻律は頭韻脚韻などの如き大づかみなものではなく、もつと効果の微妙なもので五十音の行と段とに涉つて細やかに働いてゐるといふ自分の説がこの一首では好個の實例を示してゐるやうに思ふ。便宜上羅馬字に直して見る。

*Ta bi ni shi te*

*ta reio kataran*

*Totsu O mi Inasa ho so e no*

*Ha ru no Ake bo no*

右のうちイタリツクのところばかりを細心に注視されたい。前半の*i*の働きや後半の*o*のそれ。さうして*i*の基調が*o*のそれに推移して行く途中の有様、さては冒頭の夕行が終始頻出する状、ところ／＼に句拍子を切つた如く働く*a*や、各音が交互に助け合つてみな突如として起らず不意に消えずそれぞれ嫻々たる餘韻をにほはせてゐるあたり、到底文字では説き盡し得ぬ微妙なものを示してゐるのを各自に會得されたい。恐らく日本語の音楽美に就て多少の暗示を得られるであらう。尤も作者はそんな理論で歌調をとゞのへるものでもなければとゞのへ得る筈もない。無意識に自づから佳調をなすのであらう。亦、それが尊いのであるが、これらの音調美の理も一應は心得て置いて害はあるまい。別にこの歌とは限らぬ、各自の佳調と思ふ

ものを皆この理で考へて見られると得心が早からうか。

## 紀南の冬

山紫水明といふ形容詞をそのままの自然を具へて、海青く、空青く太陽は温かに、食べものにも海幸山幸の多いわが故郷紀南の地は四時いつの氣候につけても事毎に戀しくない時はないけれども、東京に雪の氣を帯びたから風のはじまるころには、わけても望郷の思の切ないものがある。郷關を出でて二十數年になるが、今だに他郷の冬に慣れる事の出来ないのは困つたものである。誰やらも言つたごとく故郷の人情は更になつかしくないのに、どうして故郷の山河がかう慕はしいやら、二十七年住みなれた都よりも、僅に十八年間生活した田舎の方が好いのだろうか

かにも不思議である。身長五尺五寸で、體重は十二貫に足らぬ皮からすぐ骨といふ體質では、暑さなどもの数ではないが、寒さは直ぐ骨に徹るから大禁物なものにもわけがあつた。それが今は十七貫に近い肥満なのに、それでもやはり冬は參る。先づ不眠症が秋冷と一しよにはじまる。

お吉がやにいねがてのひとねんとす  
秋暈失睡人將老

と、既に冬の威に怯やかさはじめるといふのも、冬に對抗する訓練が幼時から一向出來てゐなかつたためであらう。思へば故郷で育つた十八年間に降雪なら二三度ぐらゐは見たおぼえもあらうが、積雪といふものはいづれ一度も知らない。ちらちらと落ちて來る雪片は殆んどそのまま地上で消えるか、それだけでなくも地上に足あともつかないほど落ちると、それきりだから積雪が見られないのも道理であらう。せいぜい寒かつた思ひ出といへば、中學校への行きかへりに新宮市中の川風の通る道すじの町々や、千穂が峯風のふきつけるところぐらゐ。それも駆け足で通りすぎると、二三丁目で息の切れるころには汗を催すといふ程度だから、冬の感じは

どこにもない筈である。新宮中學校では外套は無用なおしやれとして生徒等に一切禁止してゐたのは當を得た處置である。新宮は川ぞひのせむか紀南では幾分寒い方であらう。それでも或る人が東海道三保の暖かさを讚美してゐるのを聞くとせいぜい新宮程度らしいかつた。僕を知つてゐるところでは伊豆の熱海がまあ紀南と近い温かさであらう。冬は知らないが初夏の頃から推察して別府あたりも紀南位であらうか。併し九州も長崎や鹿兒島は到底紀南程温い冬ではない。土佐は知らないから比較にならない。熱海の冬ばかりではなく、一帯が紀州と伊豆では地勢の関係から、類似點が多いやうである。僕は東京の人に紀南の紹介をする場合は多く伊豆半島を例に挙げる。兩地とも先づ日本の伊太利ともいひ度いところである。ミニョンのやうな美少女は見かけないとしてもレモンの花は咲く。惜しむらくは、新宮権現の速玉神社の國寶の數々と、應擧、廬雪などを數點見るだけで、美術といふ點では遠く伊太利には及ばないらしい。それでも伊豆が唐人お吉まで土地の賣り物にしなければならぬのに比べるとまだしもわ

が郷土の方が藝術に名所舊蹟に恵まれた所が夥しいと、ついお國自慢が出る。

紀南と言つても美術や舊蹟でなく、單に冬をいふ場合にはどうしても潮の岬を廻つてしまはないでは本當ではあるまい。しかし新宮まで行つたのでは少し行きすぎる。尤も新宮でも川風さへ當らない場所なら申し分はない。自分の育つたのは丹鶴城下の、北に山を負うた山懐に、眞南に一間の窓を持つて入り際まで日の當る一室で、まるで温室であつた。冬も無論日中は火鉢を用意しないですんだ。室外でも外套が無駄だから、この室では尙更火鉢は空氣を悪化するだけの費であつた。牟婁の名にそむかないわけである。一たい郡の名『牟婁』は温室のむろの意をとつた當て字であるとか、ないとか學問的には異説もあらうが、しかし事實としてなら更にこぢつけにはならない。

紀の國のむろの郡にありながら君とふすまのなきぞかなしき

とかいふ古歌があつたが、集の名も作者も今はうろおぼえである。

紀南の冬なら、まづ那智山下を中心にして話したらよからうか。つまり勝浦まで行つてその附近で好適なところを物色したらといふのである。勝浦の町内でも港外の太地やその附近のどこでも温かさや食味には事缺くまい。宿の親切さへ見つければ。

何しろこのあたりでは十一月に水仙の花が咲く。先年故郷——下里町高芝で冬を過した時、

亡友芥川に南國通信と題して、

その一に——

爐開きと申す言葉は知らずそろ

その二に——

殘菊に水仙いけて紅茶かな

とありのまゝを駄句つて一縵を博した事があつた。老父の友人で書を好くする仙臺の人某氏が、偶々紀南に遊んで風光の明媚を愛するあまり思はず節を新宮にとどめて久しく滞在し、十

一月に咲く水仙を見て、この邊の水仙はまことに晚い、自分の地方では水仙は二月三月？に吹く花であると、語つたといふのが、わが家の語り草になつてゐる。たとへば圓形の競争場であり、あまり早すぎるのが、優に一周だけ衆を抜いて、晚すぎるのと接近して一見どちらが早いかわからなくなつたやうなものであらう。それを仙臺の衆が飽くまで自分の郷を中心にして語つてゐるのが愉快ではないか。熊野では十一月に咲く水仙を仙臺ではその翌年の二月か三月かに咲くと氣がつかなくつたのである。菊が咲き盡さないうちに水仙が咲く、相ついで梅が蕾む、山椿などはいつしかもう盛がすぎて来る。朔風を待たずに追々と春になるありさまは、秋と春とがくつついてしまつて冬なしである。事實、石垣のすみれなどは十二月、一月によく見かける。それ故、紀南の冬とは題したけれど、實は紀南には冬なしであると言はねばなるまい。曆の上ばかりでなく、事實として年の内に春に逢ひいた人は紀州熊野へおじやれと申すわけである。

春かすみ家は徐福墓畔に在り

といふのは別に句のつもりではない「家在徐福墓畔」といふ印文に春霞と冠せて見ただけのものである。

紀州みかんも牟婁まで来てしまつては場違ひになる。牟婁は夏みかんの地である。それでもところどころに柑橘園はある。老父は以前、佛手柑を栽培して鐵齋に贈つて喜ばれた事もあるが、佛手柑の栽培はさすがの熊野でもあまり樂ではなかつたらしい。一體に霜を厭ふ柑橘の屬のなかでも、佛手柑が最もそれが著しいらしい。霜を厭ふ柑橘の園は常に最も暖い場所を選んでゐるから、その樹下に腰をおろして、梢に熟し切つたみかんの残りものを貪りながら、枯れ盡さぬ草の間に餘生の夢を日向に歌つてゐる蟲の音に耳を傾ける。そのかすかな聲の斷へ間に程近い海岸の波濤を聞き入りながら身の閑散を愛し、日向ぼっこをしたならば、他郷の人もそぞろにこの地を仙郷と信じて、むかしむかしそのむかし、三千の童男童女を従へた秦の方士が移住したといふ傳説を、なるほどと感ずるに相違あるまい。先年支那に遊んで、西湖の湖畔にさる

老人と久仰。先生今次來遊目的。とか專在風光、艷美先生詩酒生涯などと、怪しげな筆談をしてゐるうちに、先生郷國と問はれて、家住蓬萊山下徐福墓畔地と記すと、大きくうなづいて、自分ももと山東の産だから、多分祖先は同一であらう、といふ意を記したので奇異に感じたが、支那人は傳説によつて、日本人を山東の移民の末孫と信じてゐる人が多いといふ事は後に聞き知つた。まさか日本人全體を徐福の從へて來た三千の童男童女の末裔と心得てゐるわけもあるまいが、それにしても紀州の捕鯨の法は徐福の黨が傳へたものだといふのは支那ならぬ紀州に於ての傳へである。

捕鯨で思ひ出したのはわが郷の冬の食味である。秋刀魚を鹽壺のなかへ切り込んで貯藏して、焼くと燻製のやうな赤い色を呈するものなどは佳味ではあるが、本來物業だから客人に供するものではないので、他郷の人は生涯その珍味を知らないで終るであらう。一たい地方の宿居で、地方的な食味を無視して材料の關係も考へないで、まづい東京流の料理を食はせて

得意、食ふ方でも満悦してゐるのは双方共不見識千萬な話である。木曾山中で色の變つた鮪のさしみなどを出されるのは閉口。木曾はよろしく岩魚やつぐみであるべく、熊野などもせめて鯨ぐらゐは客膳に供してほしい。尤も近年は鯨の美好なものも得がたいかも知れないが、燕骨をさんまの腸につけたのなどは用意して置けない事もあるまい。東京でも燕骨のある家があつたが、折角の珍味が酢味噌か何かであつたので甚だ失望したといふのは下村悦夫の談であつた。尤も折角苦心して出しても客が眞價を味へないで、へんなものを食はせると箸を取らないでも困りものだが——。思ひ出すのは二十年程前、長崎の宿で五島鯨の赤みのところを御馳走になつて、非常に喜ばしかつたので、お代りを注文して驚かれた時の事、鯨を喜んでお代りまで求める客はめづらしいと、主人も非常に満足であつた。自分が生國を打明けたので一切明白になつて主客楽しみ笑つたものであつた。この宿には年末年始の二十日ばかりゐてお正月には特有の長崎のお雑煮やら、手輕ながら、しつぽく料理のふるまひもうけた。このささやかな宿



を今だに印象あざやかに思ひ出すのは、ただ僕が食ひ意地が張つてゐるためばかりではあるま  
5。

太地なら鯨も本場だから、勝浦、太地あたりで、獲れさへすれば種々な鯨料理を命ずるのも  
一興であらう。これも紀南の冬のものである。

或る時、當時勝浦に別荘を持つてゐた一友人の離れの二階で、午後を談笑しながら南受け  
の、あまりの温さについてとうとうと睡氣がさして無實の罪を疑はれた事もあつたが、科は偏に  
温い太陽のせりであつた。こんな温度が僕には好適この上なしだが、のぼせ性の體質や血圧の  
高い人には温かすぎるといふ非難がないとも限るまい。それならそれで北向の部屋を選ぶべき  
である。これでも障子に破れさへなければ、火鉢の火が絶えても懐手だけで大丈夫である。手を  
突き込んだその懐にふくらんだ財布を握る諸君は、或は灣内の七湯を巡つて日を消すとも、或  
は熊野の主都新宮市をさして、柳暗花明の一郷に佐渡の土の絶えぬ間を、別に溫柔郷を求めよ

うと何分よろしくやりたまへである。

それはともかくとして、苟も教養を欲する人士が、時の冬たると春たるとを問はず、熊野の  
地に遊んだ機會には必ず見逃してならないものは、速玉神社の國寶の數々である。願事のほど  
は知らないが數百年前の上臈が黒髪を切つて願をかけた、その黒髪の幾束が、國寶になつて保  
存されてゐるのもロマンチックであるし、それ等の同じ時代に同じく貴婦人達に愛用されたら  
しい數々の檜扇や、装束、さくは櫛笥など、その持主の見ぬ面影を徒らにろうたけてしのばせる  
よすがとなるばかりでなく、それ自身がその持主にもをさをさ劣らず美しく、史上有數の美術  
品である。これあるがために紀南を國內の伊太利と稱するも不可なしとするのである。十年程  
前、自分が歸省中、熊野の美術を見學のためにわざわざ來た美術研究者を案内して、その意見を  
聞いた事があつたが、檜扇櫛笥など、皆聞きしにまさる逸品で目を驚かすと絶讃してゐた。就  
中櫛笥（もと十二個あつたらしいのが今は十一個ある）の蒔繪の圖案を推賞してゐた。櫛笥は

鏡臺や手鏡の匣、さては櫛など結髪用品や頭の飾など一式、大小各品を皆同一の題材で統一的に取揃へて裝飾されてゐるのである。例へば柑橘が笥の圖案になつて、その大粒のものが見事な螺細で浮き出してゐたのなど、今も記憶に新らしい。これ等の圖案一式は頗る異色のあるもので、平安末期と室町初期との中間に位して、寫實と様式化との中庸を得た調和の、獨特の美を發揮したものは他に類例もないので、假りに新宮式とも呼ばゞ呼ぶべき宇内の珍、世界の至寶といふ感激的な呼び方がその道の人の批評であつた。

これ等の品々は雨天でない限り拜觀できる筈である。紀南の冬は總じて晴天つづきである、この點も好都合であらう。たゞ有志の人士は心して午も少し早目に出かけるやうにでもない事には、品數の多いところへ、山かけの神倉はさなきだに暮れやすい。冬の日は早くかけるから落ちついて拜觀することも出来まいかと思ふ。

## 小泉八雲が初期の文章に就て

— 懐齋雜話改題 —

讀書餘談とか餘話とか、何でもそんなやかましい題を與へられたが、そんな題で書けるのは何々學人などと名告つてもをかしくない大先生方のなさること、我々風情ではちと氣がさすから、もし拙文が入用なら他に適當なものをと愚案を提出してみたが愚案の方はお取上げなく、どこまでも原案をと押し返して來たので、さらばとこんな題をつけてみた。懐齋とは亂雑極まるわが書齋の名である。内容は求めに應じて近ごろ少しばかり讀んだものを主として小泉八雲が初期の文章に關するノートである。折から今年の九月二十六日は其の三十回忌に當ると

いふから、この好機に聊か追慕の意を現はし得るのはせめてもの仕合せと、秃筆ながら取るにもはづみが出た。

回顧すると事はわが半生涯に涉つてゐる。それは上京後間もなくだつたから、わが十九歳の春、二十年餘の昔である。本郷通りの古本屋で田部隆治氏著の「小泉八雲」の原刊本——忘れもせぬが色箔で青竹の幹を現はした白つばい表紙の菊判の厚手なのを、一圓八十錢か六十錢か少々不廉な價ではあつたが、あまり見かけない本の上に汚れてゐないのがうれしいので言ひなりに支拂つて歸つて一讀して、以前から折にふれてはその作品を愛讀してゐた作家の爲人を追慕する一面、日本渡來以前の彼が稀世の大才を抱きながらまだ志を得ず年少無名でシンシナーテイやニューオールリアンズあたりの田舎で、はじめは植字工から校正、廣告勧誘をさへ勤めた後にやつと出世して（！）記者をしてゐた時代の事を幾分か知り得て、田部氏の著ではこの時代が未だあまり詳細と云ひ得ないから、もしこの部分をもつと精密に調べ上げて、後年よりも

寧ろこの當時を主とした八雲傳を書き青春の情熱をこの一すじに傾注してゐる青年八雲を如實に寫し出すことさへ出來たなら自ら詩趣に富んだ傳記文學を成し、同じく幾多文學に志しながら不遇の境涯に沈淪してゐる青年は無論、一般の青年達の志を勵ますに足るものがあらうとこの考へだけはいつも持ちながら、自ら揣つてその任に堪えぬを顧みては荏冉と打過ぎてゐた。そのうちに第一書房版の邦譯全集の出版もあり、中に「或る夫人への手紙」や「烏の手紙」などのあるのを見て、彼自身の筆によつて寫し出されてゐる當年の狀況などを幾分明にし、鬱勃なる才思を抱きながら槽檻の間に喘いでゐる天馬がその苦境にあつても孜々として新興の佛蘭西文學研究などに身を捧げてゐるのを壯とするとともに、當時の筆になる「クリオール小品集」が後年の日本に關する諸作にをさ／＼劣らぬばかりか、我々日本人にとつてはその異國的情趣と青春の氣とのために後年のものより更に魅力の多いのを感じた僕は、後年の文豪であり當年のクリオリル小品の筆者たる彼によつて新聞紙上の普通の雜報として書かれた文章が、ど

んなものであつたか見たいといふ好奇の念を湧かせながらもその機会を得ず、否、懐齋主人は敢て進んでその機を捉へようとも努めず過してゐた。しかし終に機縁はあつた。昨年、偶、その當時の八雲が筆になつた新聞雑報の一篇「絞刑紀事」が小冊子となつたものを手に入れて一讀することを得た。書はそのタイトルページに「殺人少年犯の處刑——デイトンの悚然たる慘劇——切斷せる絞索と反覆絞刑——絞首臺裏の惱ましき情景」といふ小見出しを副題とした純然たる社會面記事の特ダネに過ぎないものであるが、さすがに一片の報導を化して立派な文學になし得たもので決して僕が永年の期待を裏切らぬものであつた。結婚披露宴に闖入せんとし拒絶されたのを恨み酒氣に乗じて市内の徳望ある紳士を殺害した十九になる不良少年の處刑報道で「モントゴメリイ全郷民が必ずや多大の満足心を以て久しくその實現を見んと成してゐたともいふべき出來事」の記事として飽くまでひかへめな簡素な記事である。舞文曲筆して大衆の喝采に訴へんとするやうな平俗浮薄な調子の見えないところが筆者の人柄を示すものとは

雖、新聞記事とさへ言へば煽情的なものと思ひ込ませられてゐる我等にとつては不可思議なばかりである。この態度こそ一片の報道を化して文學たらしめ得た第一の要素として注目しなければならぬものである。それから次には要領のいい話術がある。それは最も簡單でありながらあらゆる報道すべき事實を最も手際よく排列することによつて無上の効果を上げてゐる。受刑者の生ひ立ちを記したあたりは無駄のないといふだけのものではあらうが、更に進んで彼の獄中の生活やその奇異な挿話の幽玄に鬼氣を帯びたものは後年の文豪を思はずに足りるものがあるのは異とするに足りないとして、彼が己か處刑臺の建造の物音を獄裡で聞く事實や彼の兄が弟の處刑臺上で道化たしぐさをしたといふ記入など文の構造の非凡を感じしめるものではないか。いよいよ處刑に先つて豫め絞索の強さを記述してゐるあたりから一轉した筆致は、最初の處刑が絞索の切斷によつてその目的を達し得ず、爲めに唯人事不省に陥入らせた受刑の少年囚人の茫然自失の心事や、その無殘な囚人を再び絞首臺上に運ぶあたりの到底涙なしには讀過

させぬ嚴肅さ。終にその再度の絞刑の成功を立會ひの警察醫が檢してゐる受刑者の脈搏によつて讀者に報道し、最後に「絞索は頸部の肉に深く食ひ入り麻の絞り目は皮膚に紅く印されてゐた。醫學的調査によつて頸骨は折れてゐる事が判明した。」と結ぶあたり。一種科學的ともいふべき冷靜な手法の巧妙なる効果は讀者の平俗な感情に訴へず、それは嚴にそんな感傷的な涙などは拒否して寧ろ端的に理性と良心とを喚起して讀者が人間性に肉迫するあたり、單に手法とか話術とかいふものではなく、僅に二十五歳にしか過ぎなかつた筆者が既に人としての大を成してゐるのを見るべきだと思ふ。一片の報道の文がその讀後の効果によつて一種無類の文學を成してゐるの知つた僕は、新即物主義文學乃至報告文學の一先驅とも稱すべき一個の好短篇を讀み得たのを限りなく喜ぶにつけて同じ記者の手になつたこの種の報道の文字をもつと見たいとの切望を生じた。全集に採録されてゐる當時の文章がほんの一小部分に過ぎず、その選擇も從來の保守的な文學觀の見地によつて取捨してゐるのを慚らずとしてゐた僕は、最近幸にもア

ルベルト・モデル氏が八雲の少時の筆と推定して編み成した「アメリカ雜纂」第一卷を手にし得た。彼が新聞記者としての手腕を認められた最初の「製革所殺人事件」の報道と「尖塔登攀記」との二篇がそのなかに納められてゐたのは、田部氏の筆によつて久しくそれを聞知してゐた僕にとつては正に渴を醫し得た心地のせられるものであつた。田部氏の「小泉八雲」によれば——

『ヘルンがこの新聞に關係するやうになつてから間もなく、シンシナーテイで有名な製革所の人殺し』（ハーマン・シリグなる者、その仲間に殺された事件）として長く知られて居る事件が起つた。ヘルンが有名になつた起りはそもそもこの事件から始つてゐる。入社後間もない事であつた。外の記者が悉く出拂つたあとであつたので、急ぎの場合新參のヘルンをやつて見たがその記事は讀者の大歓迎を受けて意外の成功をもたらしたと云はれてゐる。（グールドの説によればこの事件のあつたのは……）

『この事あつて後、ヘルンは探訪、三面記事に最も重きをなすに到つた。ヘルン又はその職務

に對しては最も大膽機敏で、危険や、困難を顧みなかつた。ヘルンがこの「人殺し」の記事は當時のこの種類の記事を歓迎したシンシナーティ人の趣味を思ふべき程ただ精細にその慘狀を寫したものに過ぎない。之を讚してポオの凄慘以上であると云ふのも、又之を貶してヘルレの藝術的良心を云々するのも、何れもその當を得ない。』

「又つぎに命ぜられて、シンシナーティのセントピーター寺院の塔上にある十字架に上つてその都市の鳥目觀を記して滿都を驚かした事もあつた。しかしこの時ヘルンは宙乗りのやうな危険を冒して攀ち上つた事は上つたが、自分では強度の近視の肉眼を使用する考はなかつたので、眼鏡をさへ携へないで上つたのであつた。そして記した事はただ想像によつたのであつたが、その記事の精細なる事驚くべきであつた。』

以上右の引用によつてもほゞ察せられるであらう如く「殺人事件」は記事がといふよりも事件そのもの——娘の不義の相手を三叉を揮つて殺害してその死屍を製革用の爐の中に隠匿して

のが發覺した出來事が人々に喧傳されてゐたのを、その現場の殘忍さを直視して點々たる血痕や半焼けの死屍などを忌憚なく如實に細描したといふだけのものであるかも知れないがこれだけに無無論相當印象的な筆力を示してゐる上に叙述の順序の巧妙な單純化が自らの起伏によつて一篇の犯罪小説或は探偵小説的短篇を構成してゐる。その眞犯人を最後まで明記せずして自づと讀者が自由な想像に委ねて置いて略的中し得る程度のままに残し、眞犯人の報道のためには別に後報を待つたのは自然の経過によるもので必ずしも彼の構成的効果の自覺によるものでなかつたかも知れないが、殺人の現場を外部から聞知してゐた少年の細叙の如きは、勿論筆者の興味を持ちどころを思はせ、その自覺の有無は問はず、記されたものの結果から見ると興味ある實話的短篇を成してゐる。「尖塔登攀者」に到つては又自ら別様の趣の甚だ喜ぶべきものがある。それは「絞刑記事」の宗教的ともいふべき味や「制革所殺人」の世紀末的陰慘なのとは別だ。この異様な體驗の報告記録は一個新體の現實主義的ゴシックローマンスともいふべき短篇

の創始である。塔内及び塔屋上の光景の描寫の鮮やかさは塔屋登攀中の夢幻的恐怖と相俟つて我等に清新な詩趣を感じしめる。そのヅボン吊りに髑髏と交叉骨クレストボーンの模様のある浮彫止金を用ゐて居たといふ職業的登攀者ウエストンの性格素描にも興味あるものを覚え、「やあ、これや、素晴らしい眺めだ」と(落日の景に對して)ウエストンは思はず聲を上げ「だが俺は都會の鳥瞰圖は數萬の燈花のきらめく夜に如くはなしと思ふがね。そのうち一度晴れた晩に一緒に十字架へ登らうぜ」記者は震へ上つて、別れた」とその塔上の美觀や恐怖を言外に廓大的に残し置いて結んだこの結尾の妙にも感心したものである。この一篇が隻眼のそれも近眼二度半といふ彼の體験的記事であるといふに到つては無鐵砲ともいふべき彼の果敢な冒險好きの一面を證するといふ別途の興味もあるわけである。僕は上記の諸篇のうちでは絞刑記事に最も敬服し、尖塔登攀者に最も愛好を感じこの二篇はタリオール小品集の諸篇とともに彼が後年の筆とは全然別個の味を持つ傑作と思ふ。それは年少時の推敲の足らぬ金取り仕事の駄文であるとたとひ筆者自身

身がその承認を拒まうとも僕も幼稚ながら一個の批評家としての權利によつて自説を力説するつもりである。

前述の諸篇の外に或は貧民生活の寫生や黒人の哀話などの一讀に足るものに乏しくないが就中、「アメリカ雜纂」の集中で最も短文たる蝶の幻想曲といふのは編輯者アルベルトモデル氏によつて散文詩と分類されたものであるが——その分類のためか、起筆の數行は措しくも省略されてしまつてゐるが、その註によれば、省略の部分は某蝶類蒐集家の蒐集品を見物した時の報道記事として書かれた事を明示した部分であつたらしい。しかし一個のアマチエアたるモデル氏をして散文詩と認めさせたのも決して無理のないもので、さながら蝶の翅の美を傳へるやうな微妙な色彩に富んで一篇でこの蒐集品によつて各産地の自然の美が自らこれに啓示されてゐるのを見た記者の感想をも附記して、さながら一個の詩的文字でこれを以て新聞の報道に代へたのは材料が蝶であるだけに面白いものを感じ、従つて起筆を省略したモデル氏の猿智

惠を憤しく思ふ者である。

僕はこれ等の新聞記事を毎朝讀む事の出來た往年のシンシナーテイ及びニュー、オルリアンズ兩市の市民をさながら生きて天國に居る人を見る如く羨む者である。

さうしてシンシナーテイは知らず、八雲によつて書かれた、幾多薄氣味のわるいところはあ  
るが限りなく美しい町ニューオルリアンズのクリーオルの往年の住民と身をなして毎日若い八  
雲の記事は無論時には挿畫をも試みたといふ——新聞アイテムやタイムスデモラットさてはシ  
ンシナーテイの古新聞コンマーシヤルや繪入日曜などを毎朝讀みたいといふのがこの頃のはか  
なくをかしい空想的希望の一つである。

尙諸篇の執筆年代を参考のため記して置かう。

制革所殺人事件——一九七四年

絞刑紀事——一八七五年

尖塔登攀者——一八七六年

蝶の幻想曲——一八七六年

クリオール小品 一八七八年——一八八〇年

即ち二十四歳から三十歳位までのものを假りに初期の文章と見たのである。



## 月光と少年と

——魯迅の藝術——

自分は魯迅とは一面の識もない。二度と再びは容易に現れさうにも思へない偉大な東洋の文學者と偶その時代を同じくしながら遂に相會する期を永久に逸したのは洵に恨事である。一大恨事である。それでも魯迅の藝術に幾分親炙し得たのはまだしもの幸福である。

魯迅の作品を少し注意して讀むと、阿Q正傳や故郷、狐獨者などの如き比較的長いものは申すまでもなく村芝居などの小品のやうなものでさへ、きつとどこかに月光の描寫と少年の生活とが表れてゐるのは不思議なばかりである。惟ふに、月光は東洋の文學の世界に於ける

傳統的な光である。また少年は魯迅の自國に於ての將來の唯一の希望であつた。中華民國の全部が自分を殆んど絶望させるにしてもまだ眞に絶望するには足らぬ、この國にも無數の子供等があるといふやうな意味を魯迅の文中から讀んだのを忘れないである。月光を魯迅の傳統的な愛とすれば少年は將來への希望と愛とであつた。かく觀じて魯迅の諸作の月光と少年とを見るべきであらう。

魯迅は自國の過去を最もよく理解した文學者であつた。彼に中國小説史略のある一事だけでも彼の過去に對する智識と理解とは明かであるのに魯迅はその智識と理解とを彼の頭腦のなかに持つてゐたばかりではなくその作品のなかに血とも肉ともして持つてゐたわけである。阿Q正傳はその内容は無論手法から見てもいかにも支那風な作品である。この一面があつた作を成功させたもので自國の大衆を魅することが多大であつたと同時に他國の識者に驚異的な産物であつた祕密は實にこの一點にある。近代歐洲文學の理解において決して人後に墜ちなかつた彼が

他の一面において飽までも支那風であつたのが歐洲人にとつて彼の作を歓迎するに容易ならしめ、且つ支那の民族性の奥行を了解せしめ驚嘆せしめた所以であつたらうと自分は信じてゐる。

彼の虚無感は決して近代歐洲から來たものではなく自國に老莊以來傳來のものであつた。彼が決して神總質な憂愁に陥ることなく快活な笑を持つてゐた所以もこゝに起因してゐる。快活な虚無感、これが阿Q正傳の基調になる文趣である。彼の絶望はそれ故、人に屬しないで天に屬するものである。現今の支那においてさへ希望を發見してそれを子供等のなかに見出すことの出來た所以であらう。

彼以上に西洋の教養を持つた東洋人なら決して乏しくはないであらう。しかしそれほどの教養を以てして、終にどこまでも純粹な東洋人であつたのは有難い事である。この一面では彼は我が國の幸田露伴と似通うたものを感じさせられる。

彼の文學史上の事業を見て、我國の長谷川二葉亭や森鷗外を思ひ出してこれと對比すること

は自分も既にした。さうして幸田露伴をもう一人加へなければならぬのを今にして氣がついた。この三人を一人にしたのが魯迅であつたと言つたら、多分は魯迅の事業とその爲人とを稍髣髴せしめる事が出来るであらうか。

現代支那はたとひ魯迅を失つても矛盾の如き大才をまだ持つてはゐる。しかし、もう一度魯迅のやうな偉大な支那人が出るかどうかは疑はしいものである。

魯迅を一度日本へ招いて東洋人の精神を追求して置きたい。一般の日本人のためにも偉い人物は近代でも必ずしも西洋からばかりは出ないといふ自覺のための實證として置きたいといふ年來の希望も、嗟、終に水泡に歸した。この際せめては、彼の隨筆體の自叙傳「朝花夕拾」でも譯出したいものである。——(十月十九日、魯迅の訃を聞ける日に)

## 薄紅梅の作者を言ふ

上

事の順序として先づ拙文について自分で語る非禮と悪趣味とを宥されたい。中央公論の新年號に「日本文學の傳統論」を説いた自分はその末節において用もないことを記したくせに最も大切なことを記してゐない。先日來客の一人でそれに氣づいてこれを指摘してくれた人があつたのは甚だ喜ばしかつた。拙稿の末節の無用は自分で疾くに附記しておいた。しかも、日本文

學の傳統の今日に及んでゐる姿をいはうとして一言の泉鏡花に觸れるところのないのは正しく奇怪事であつた。客のこの非難はむしろ當然すぎる。

拙文を幾分でも理解したほどの人なら誰でもこの疑問に逢著する筈である。それゆゑ、この非難はいはゞ拙文を注意して讀むよき理解を持つたといふ證據に近い。筆者は常に必ずしも立論に賛成を要求する權利もない。賛否は讀者の自由として残された問題である。その代りにはいつも理解は熱望してゐる。それは恐らく讀者の義務であらう。理解といふ酬いを得なかつた場合、筆者は徒勞の思ひとゞもに孤獨の感に堪へない。しかし一度理解された上の話ならば當然されるべき非難は筆者も甘受すべきであらう。これまた、筆者の義務であるらしい。

負け惜しみめくが拙文に鏡花をいはぬといふ非難は寧ろ待ち構へたところでさへあつた。

自分が日本文學の傳統を説きながら言の鏡花に及ばなかつたのはその無視でないのは勿論、決して單純な不用意からでもなかつた。憚りながら少々慮るところがあつただけである。自分

はかの一文について發表する豫定の日本詩歌の精神を論ずる一文に變化を求めて、現代から古代へ倒叙する關係もあり、散文の思潮と韻文の精神とをそれとなくつなぐ必要もあつたら、本質としては現代の最大の詩人たる鏡花が何故に散文の物語作者として立ち韻文に赴かなかつたかといふ疑問の解決から説き起すのを最もよしと心得、正月號の稿には兩三度記すべき場所に遭逢しながら、わざと何も説かないでしまった。まだこの大立物が出る幕ではなかつたからである。しかしこれは樂屋の話だから、讀者のためには一言して置かなかつたのは正にひとり合點、不用意の誇りは免れまい。客にはつぶさに筋書をはなしておいたが、一般にもこの口上は述べておく必要はあつたのと苦にやむ。事の序に發表を期してすでに起稿大半脱稿してゐるものとは別に、鏡花に關して一言したいと思ひ立つた。

恰もよし、本紙は近日中に老來詩興益々旺んな大人が近作薄紅梅を發表しはじめるといふ快事を豫告してゐる。別に何人からも廣告は依頼されないが、この機を利用して、その藝術につ

いて一言することは、思ふに、参考として讀者に一利はないまでも大害もあるまいし、またわれ等風情が疣贅の不文が、將に筆を執らうとするこの大作家を甚だしく煩はすとも思はれないから、心おきなく管見の一端を記すとしよう。これまた日本文學の傳統の一側面觀のつもりである。

一人の鏡花をさし措いて、日本文學の傳統の現代に及ぶものをあそこにあるこゝにあるかと捜し求めるのは、デオゲネスの皮肉な晝提灯の狂態でない限り迂愚もまた甚だしいものである。一そ鏡花を論じた序に日本文學の傳統を知る方が適切ならぬものであらう。

時人の近來多く鏡花を讀まないのは、鏡花の罪ではさらくない、偏に時人の罪である。時人は西洋に文學あるを知つて、わが東海の君子國に文學のあるのを忘却してすでに久しい。今學者の思ひをこゝに潜めるもの多い時、鏡花の新作の現れようとするのは實に偶然ではない。

鏡花世界の地核を形成するものは、疑ふまでもなくものゝあはれとその本質を同じくした人間性の善美に對する讚嘆である。この點かれの文學は母國の傳統と同時にその師承とに忠實なものである。たゞかれの文學に表れるや、「ものゝあはれ」はその温和雅馴の趣からいさゝか遠ざかつて在來のものより主觀性の強烈濃密な、矯激奔放な姿を示す。全然別個のものゝ如くではあるが、これまた千變萬化を能くする「ものゝあはれ」の一變貌で、たとへば潺湲たる細流の直下して龍を現するが如きであるから、その本質の異とすべきではないが變調もこれくらゐに激しくなると自ら別個の精神のやうな現象を呈する。溫雅なものが自らに秋霜の氣をさへ帶び、しめやかなあはれが一度、悲痛激越な情に感じては、往々異邦の悲劇に類する痛烈をさへ示す。「ものゝあはれ」のフレキシビリテイに富むや正にかくの如しといひたい。それにしても

何によつてこれほど顯著な變貌を示したか。答は甚だ簡單である。鏡花が一個熱血の漢子であり、至醇の詩人であるがためである。上田秋成のやうな先例も既にある。冷水も亦かれ等の胸底と筆端とのうちには能く煮沸し迸るのである。細流のよく飛泉となるのは多く怪しむことを須ひない。たゞ直下する崖上を細流の偶行くことが稀であるから、龍を現することも稀有である。換言すればその感情の至醇、その熱情の過剰——つまり彼の個性の詩人的なあまりに詩人的なものが「ものゝあはれ」の本來の微温に満足し得なかつたのである。この同じ理由は激越な情をやらんがためには事の非常を喜んで、作意は時に波瀾狂濤のなかに没し去り、讀者をして往々天馬の空中の密雲に鎖されて多く地上を忘れたのでないかを憂へさせるものがある。しかも詩人が熱情と至誠とのあるところ、赴くがままに別に天地を創造しつゝ恣に狂奔し、興の盡きるにあらざる限りは遂に歸去來を肯んじないのである。但讀者は鞍上に安んじて四周に展開する奇景を歎賞しつゝ行くに任せてよい。卷を閉ぢて後、心靜かに追想すれば必ずや一度甘

美至善な人間性の深奥境に身の在つたのに思ひ到り、はじめて作者妄りに作らず矣と悟るであらう。

本来藝術の境はいつも眞實らしい眞實のなかみにあるのではない。虚なるが如く實なるが如く虚々實々、皮膜の間、別に藝術的眞實の境が嚴かに存在するの知らなければならぬ。この虚々實々の藝術的仙境は必ずしもわが國固有のものではないが、わが國にもまた古來、近松のいはゆる皮膜の辯や俳諧の「虚實論」として、すでに久しく傳統をなしてゐる。鏡花のは或はもつと古く世阿彌の「ものまね」を排して専ら「幽玄」を尊ぶあたりから脈をひいてゐるかとも思ふがまだよく考へない。たゞ鏡花の藝術が謡曲に影響を負ふところが多いと見受けられるのや、その能狂言の家の出であるのを思つてこの推測をするまであるが。

ともあれ詩は「糸切れて雲より落つる鳳巾」の常識的な實にはあらず、さればといつて「糸切れて雲となりけり鳳巾」の虚にもあらず、「糸切れて雲ともならず鳳巾」の虚々實々を正しい境

地とし、むしろ時には詩人の誤りとして、感興の余り詩的妄に陥るとも、決して常識的平俗に墮する事の絶えて無いのは、その誤りを見て君子を知るべきで、鏡花の詩才の縦横を知ると同時に、由來するところあるを見るべきであらう。近代の藝術が多く凡才の手にかゝつて「ものまね」を隨一の藝と心得てゐる間に一人のこの作者あるを欣慕する者、必ずや筆者のみではあるまい。

下

「藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也。(中略)皮膜の間といふが此也。虚にして虚にあらず、實にして實にあらず。此間に慰みが有たものなり」

といふのが人も知る如く「難波土産」のなかに近松門左衛門の言葉として傳へてゐるところである。

近松のいふ「慰み」といふ言葉に關して世阿彌が「習道書」のなかに面白い言葉を殘してゐる。

「抑々をかしさとは、必ず數人の笑ひどめくこと、俗なる風體なるべし。笑の中に樂を含まむといふ。これは面白く嬉しき感心なり……」といふのである。藝術上虚實皮膜の間を主義としてゐるかと思はれる鏡花はまた「慰み」を決して輕んじてゐない。「俗な風體」のなかに「面白く嬉しき感心」を催さしめることを喜ぶのである。これも傳統に従つてゐるのではあらうが鏡花の作品のやうに激越な情懷を藏したものの、半面に快活を「面白く嬉しき感心」を用意しておいたのは單に傳統に従ふといふよりも、もつと深い用意があるに違ひないと推察出来る。事實これがなかつたならばあまりに陰慘な或は蕭條たる空氣をさへ醸成するのが鏡花の藝術だからである。この慰みを戯作者めくなどと一口に輕んじてはなるまいと思ふ。

鏡花はその虚實主義や「慰み」のたしなみからくさ草紙の流を汲んだが、彼の至醇熱誠の

爲人は、くさ草紙風の鏡花世界のなかに藝術の眞を充實させ、その荒唐無稽を嚴かな神秘にし文明批評や性格描寫などをも必要に應じて鑲めた。善美を愛する彼は社會惡に對しても決して無關心でなかつたから、可憐に美しい者に對する同情と、金權の暴威に身を委した輩に對する憎惡が凝つて小意氣な社會主義者のやうな風貌を彼に與へた。近代資本主義發生期の敏感な藝術家らしい感情が、いはゆる「いき」「通」「粹」の藝術精神と結びついたものであつた。

これ等の事どもを諒解するほどの人士でも時に鏡化の文章を難解とする向がある模様である。曷んど知らん最も流麗で魅力のあるのがあの文章である。虚々實々の鏡花世界を現出するために是非ともなければならぬのがあの華やかに優美に、即ち幽玄で、さながら友禪の模様のやうな大まかさと細かさとを兼ね備へた、さびもしりもある散文詩のやうなあの文體である。これを難解といふのは本來の日本語の美にはまるで盲目な、へたな翻譯小説やそのまがひものなどの三つ子が數をおぼえはじめたのであるまいに一から十までを克明に順々に記述す

ることだけをもつて文章の能事と心得て、語にも飛躍もあり含蓄もあること、なければならぬ事を忘れてしまつてゐる輩のたはごとなのである。もし難解ならば得心の行くまで反復熟讀して、文章といふもの、少くも日本語の本當の文章といふものゝ妙趣、それも極致を示すものが目の前にあるのを隨喜すべきであらう。わけても室町小唄などで時折發見するやうな、いみじき官能描寫などが場所によつては應接に遑もないほど現れるのに感涙を催さぬでは遂にともに文を語るに足らぬ。

所詮鏡花の文學は純然たる日本の傳統に基づく様式本位の、いはば圖案風な藝術である。忘れてもへたな寫實的眞實などを要求してはならないものである。

これを読んで愛好するとせぬとはもとより讀者の自由に屬する。しかし折角書かれ、さうして折角讀んだものを先づ先づ理解するくらゐの事は讀者たるものゝ義務であらう。初心な讀者への手引にもと、漫然と記した後輩の妄言が作者の不興を買はなければ幸甚である。

## 菊花談義

——原題「多く菊花を寫して」——

1

多ク臙脂を購ナヒテ牡丹を畫クといふのは畫家の謙辭であると聞く。多く菊花を寫してと題したのは民族性と藝術とに關する小偶感である。それが偶菊花を寫してゐる間に菊花に關聯して思ひ浮んだので正月と菊花とでは季節はづれではあるが、かまはずにそのままを題とした。

「黄菊白菊その外の名は無くもがな」の句を冒頭に置いてすべての花は原生種に近い單純なもの程よいと記したのは十年も前の事であつた。この心は今も失つたわけではないが、さる人



が自分で作つたといふ自慢の花を一鉢貸さうといふので見せて貰つた。先方では自分が畫に熱中してゐるといふので描くだらうといふつもりであつたらしい。ともかくも借りた。

洋畫家が文化住宅の赤い屋根のある風景ばかり捉へるのも一應尤もとは思ふけれど、松や菊のやうな西洋で手本のないものを自由に描きこなすことをして見たらよからう。して見なければなるまいとは以前から考へてゐるところであつた。兒嶋善三郎氏が好んで松や竹を描いて面白いものを見せてくれるのや、梅原氏が近年わざとならぬ日本風の間覺を示した作品の出来るのも愉快な事どもである。この兩氏の作品などに自分は桃山時代の美術の氣息を感じて日本の洋畫も遂に茲に到達したかといふ喜びをひそかに感じてゐる。

それについて思ひ當るのは日本の桃山時代は西洋の文藝復興と殆んど同時代だといふ事實である。あの藝術的な氣運が言はば無線的に東海の一孤島まで漂うて來てゐたのかと氣づいて驚くのである。

ある人の持ち込んでくれた菊は、作りはじめて二年目とかで、見事には咲いてゐたが、老父の評によると葉が十分にはついてゐないといふ。老父はむかしの友人で菊作りを道樂にしてゐた和尚がゐたといふので、それから聞いた秘訣といふのを傳へてくれた。素人考へとまるで反對の事をして効果を擧げるものらしい。一番勢ひの悪い芽を残して置いてそれへ存分に肥料を施すと、見事な葉が花のところまで生え揃ふといふのであつた。瘦地で育つた桐が目の細かい根のいいのが育つといふ話や、枝で苦しんでゐる樹は根でも苦しんでゐるといふ話などともに、この菊作りの秘訣も修養上暗示的な話柄である。

或る人の作つた菊といふのは、二年目といふだけに、なるほど葉が下の方ばかりに榮えて、花輪のところまではまばらになつてしまつてゐる。それでも五尺にあまる莖の上に、殆ど徑尺に及ぶ大輪を頂いてゐるのはすばらしく見事であつた。

何人の句かは知らないが「菊作り汝は菊の奴かな」といふのがあつたのを愚劣なものに思

つてゐたが、今作られた見事な花に對して、この堂々たる姿の品位に富んだのを見て、これに王侯に比すべき位を見出すと人間たる菊作りを奴と呼んだ意味をはじめて悟ることが出来た。

やはり俗な句といふ感じは失せぬながらにその作意だけは同情していいのを知り、また作られた花もまんざら捨てたものではないなあと思ひはじめた。

窓に近いところへ鉢を据ゑて飽かず眺めた。このかがやくやうな品位のある美しさを描いて見たいと思はぬではないが、中有にぼつかり浮いてゐるこの大きな花をどう取扱つたらいいものやら、とんと手に負へない。結局小さな切花を瓶に生けて見たらといふ事になつた。

これがやみつきで一秋を菊花ばかり寫して暮した。習作は數へても見ないが十枚以上あらうか。

2

そのうち、或る時、赤い大きなのを二輪と小さな白い球のやうなのをたくさん生けたのを寫しはじめたら、赤いのがどうも様子がちがふ。

どうかした拍子に——といふのは描きそこねた畫面のものの事をいふのである——注意して畫面と花とを見くらべてゐると、畫面の寫しそこなひばかりではなく花そのものも色や形がだんだんとダリヤに似て來る。下手の書き損じのためばかりではなく、花のどこやらにダリヤの面影があるらしいのである。

「どうも不思議だ不思議だ」

とひとり言を呟きながら筆を動かしてゐると、茶を運んで來た家内が何を不思議がるかといふので一通り説明してやると、その花は西洋種だと花屋が言つてゐたといふ。葉のいゝの

を擇つてゐたら、西洋種だから葉は問題にしないので葉のいゝのは殆どあるまいと言ふので判つたとの事であつた。成程、何やら幾分腑に落ちた感である。

家内は繪にするのに西洋種ではいけないのかと愚問を發するが、自分にもその點は判らないから不得要領にして置いたら、その後買つて來るのが大部分どうも西洋種らしい。

菊の花を寫すのはなかなか飽きなかつた。有難い事に、もちのいい花で、水をよくあげると二日三日目位が益美しくなつて、その後、色も形も更に變らないので自分のやうにのろい、デッサンの間違ひを追々と發見して行く者にとつては好都合な對象になり、同じものを幾度かやつてゐると少しづつ會得がいく點があるので花の盡きるまでやつて見ようといふ氣になつたのである。

好んで西洋種を買ふわけではないのに、日本の花は種類が少いのか、はやらないのか、いつも同じものばかりで、それも斬り立てのやうでないから自然西洋種になるのであるといふが、

ダリヤまがひの手はじめに、其次のはうす紅の小さなのがコスモスに似てゐると思つたらこれも西洋種。その次に稍大形の黄菊はこれはまるで向日葵であつた。

奇妙に、これ等はどうも一目見た時には普通の菊に相違ないのがつくづく見て寫してゐるうちに他の花に類似してゐるのが發見されて來る。西洋種といつた所でさう永年彼地で育つて來たわけでもあるまいが、かうも著るしく變化するものかと驚くばかりである。

本來が日本的なあまりに日本の花だけに少しでも變ると目につくのかも知れないし、また最初一度ダリヤのやうなと思ひはじめたのは下手の寫しそこなひでそれが偶然西洋種であつたのからは何か自己暗示見たいなもので或はコスモスの如く、或は向日葵の如く思つただけの事かも知れない。

コスモスやダリヤや向日葵が植物學上の科から見て菊とどんな關係があるかを知つてゐると此場合もつと確信を持てるであらうが一向無智でお話にならない。従つて自分のばふとした幻

覺みたいなもので、之亦癡人が夢を説くに類するかを虞れるけれど、自分として自分の目を信じないではゐられないままに、風土の影響といふものがこれ程偉大で微妙なものとはじめて気がつき、地方的な特色のはつきりしてゐるもの程、たとへば純白なものが周囲を敏感に反映するに似て、他國の風土の影響變化が著るしいのかと、これは大して不思議でもないが、格別に面白い現象に感じた。さうしてかういふほのかにかすかな區別も菊花に親しむこと日の浅い西洋人が見たところで果して氣がつくものであらうか、どうか。さまざまな事どもが、とりとめもなく暗示的に思はれて来る。かういふ感情をひとり面白がりながら、ブラッシュを揮つてゐるのは、出来るものの巧拙にはかゝはず楽しいものである。

あまり花ばかり寫すので、花瓶はある限り描いてしまった、もともとあり合せのものを使つてゐるだけに幾度も同じのを寫してゐると、あまり氣が利かぬといふ感じがして來た。今度はもう花瓶は描きたくない。それはほんの口もとだけ少し寫して花だけを主にして描いて

見たいといふ氣持になつた。

3

この思ひつきでキャンバスを横にして寫して見たら、構圖が、どうやら裾模様か杉戸に描いた花みtainな感じになつた。いゝか悪いかも知らないがままよもつと描いて見ようと、下手の氣安さにぐんぐんやつてゐるうちに背景の一方が灰色に、別の一方が黄と綠や淡紅などのものが、銀地、或は金地の感じがあるやうに思はれる。裾模様や杉戸のものらしい圖柄と一脈の調和がある。別にそんな意識を働かすほど腕があるのではない。いはば偶然にそんな事になつて來たのである。これからさきどうなるのやら面白いやうな心配なやうな子供らしいのしみがある、これは畫を描く時に特有なよろこびである。多少ともたしなみのある向は、かういつただけで這般の消息を首肯してくれさうに思ふ。

花と背景とをかういふ風に行きあたりばつたりに描きつづけて、ともかくなにやら出来て来た。今度は葉つ葉を寫すばかりになつて来たなら、もう今まで出来てゐる部分の支配を多く受けなければならない。

金地と銀地のやうな上に裾模様か何かの圖案の様に出来てしまつた花の葉つ葉である。それが、その綠色に使つたヴィリヂヤンとベール・コバルトとが自然と緑青や白緑のやうな色調にならないと落ち着かないのが奇妙である。

平べつたいたいへんな繪が出来てしまつた。どうもよくないらしい。だが裾模様のやうな杉戸の隅にあるものゝやうな感じが捨て去つてしまへない。妙にいたはりながらどうしたらもう少し立體的になるのか、せめても少しアクセントが見つかるまいかとさまざまにやつて見ることが、どうにも手に負へない。皆——といつても家の者のいづれは素人ばかり——に見て貰ふが、皆首をかしげただけで誰もとかくの批評がない。せいぜい今度のは變つてゐるわねえぐら

ゐなところである。言外に不賛成の意が仄見えてゐる。來客の一人は他の一枚を讚めた後で、裾模様の菊の方を顧みて、あれは僕にはわからないと言ひ出した。大して自信もないくせに、かう言はれて見るとここにある試みが理解されないのを残念に思ひ、やがて相手の言葉が一場の妄言であると思はれなくなる。全く自らブラッシュを執らない人間の評言などはいつてもかきなものである。

或る男（自ら立派な批評家を以て任じてゐるからなほ笑はせる）が屋根を描いた繪を見て、この屋根には温かさがある。確かにこの下には人が住んでゐますねと讚めてくれたのは苦笑を禁じ得なかつた事もある。

こんなへんなおべんちやらにくらべると、えたいの知れないものを解らぬといつて貰つた方がずつと有難いのに、作家といふものは素人のありのすさびでもやはり自分の仕事がいとほしいからほほ笑まれる。

こんな不評の間に唯ひとり姉だけが賛成者として現れた。これは夏のはじめに庭前のつくばいと八ツ手の葉を寫した時に大へん喜んだ人である。或る風景畫を一言の下に排斥した人である。決して繪の鑑認があらうとも思はれないが、庭前のつくばいと裾模様とに一味通ずる趣がある上に、この二つは不賛成の風景畫と全然反對な氣分で出來てゐるのだから、まんざらのちやらつぽこではなく姉には姉だけの考へもあるらしいので裾模様の菊も捨てないで置いて姉に進呈して保存して貰ふ。年を経てから見たらどんな氣持がするかは判らないけれど。

## ベランダ清閑

——近ごろ書業の事など——

暑くなつてしまつて部屋が住みにくい。冬の間は應接間にも書齋にも畫室にさへ役に立つて重寶な一室だが、方角を少々とり違へて北向きとばかり思つてゐた窓が、やゝ西寄りのため、午後四時ごろになると西日がさすので困る。それに税金を納めなければならない時季が來たら當分書業はやめて本職にとりかゝる。この方は多く夜業だから寢室で間に合ふ。税金を納めるために仕事をしなければならぬなどはめちやだ。平素の心掛が悪いためと思つてくれればいけない。原稿を買つてくれるところもあまりないくせに、税金は一流作家なみに拂ふ義務が

あるらしい。書業どころの沙汰ではないと、うろたへてペンをとつたらなか／＼出来なくて大ぶん久しく繪筆を取る折もない。二十日も繪筆をとらないといふのは近ごろにない状態で甚だ不満である。作品がもう少しで目鼻がつきさうになつて一息ついたところに、一輪の白いダリヤと紅いボンボンダリヤが二輪それに柳が一枝挿してあるのを見ると、もう一息といふ創作を打捨てて、一枚描いて見なくなつた。六號大の一枚出来た。どうも上出来といふところへは行かぬらしい。毎日描いてゐないと勝手が違つて不成績のような氣がする。はてな、してみると本職の方も毎日やつてゐないでは力量が益々衰へて行つてゐるのではあるまいかと少々不安になつた。もう二三日我慢して書きかけを片づけてしまつたらゆつくり繪筆をとるとしよう。蓮を描きたいものだがどこか適當な池畔がないものか。お寺かどこかにあるといいが。植物園へ出張してもいゝ、早朝なら見物も大して集まるまい。今年は思ひつくのがおそくて時機を失したが來年からは庭前へ蓮を作つて見よう。蓮、朝顔、百合、描いてみたいものならずる分あ

るが、その割合に書きたい小説のないのはよくないな。

先年信州から送つてもらつた百合根の食べ残したのを日時計のぐるりに埋めたら芽が出てつぼみが十づつぐらゐ出来た。それも今に咲くであらう。あれが咲いたら、例年最もすずしい芭蕉のかげの窓からよく見えるところに植ゑたはずだから、書齋も畫室も應接間もあの芭蕉の窓の下に移轉すとしてしよう。さうして創作は好ましい題目を思ひつくまで廢業としてしよう。夏中は花を描いて暮したいものである。去年はつい夏の花を描きそこねた。去年の夏は何をして暮したのだらう。庭園や附近の風景を二三枚寫したただけであつたな。身を入れて花を描き出したのは菊花からであつたから、遂に夏花は描かないでしまつたわけである。それで夏の花を描き盡くして菊花の候になると丸一年花に熱中したことになるのである。今までのところ牡丹といふ奴が一番手こずつたわけである。あれは六七枚描いてみな失敗、花がなくなつたのでやめた。

誰か二千圓ばかりくれる奴がゐないものかな。その半分でも四分の一でもいいが。畫室がな

くは女が描けない。こんな単純な理由もわからないで静物がお好きですかとぬかす奴がゐるので腹が立つ事がある。やつぱり人體が一番面白いには相違あるまい。むつかしいのも尤もむつかしからうが。

百合が咲いた。白いのだと思つてゐたのに赤いのであつた。食べる百合といふのは赤に限るのか知ら、何で白い百合と思ひ込んでゐたのだらうか。庭前の百合の赤を少々不満足に思つたのは赤い百合が気に入らないのではない。白い花を描きたいと思つてゐた豫想に反しただけである。偏奇館の前裁にはたしか白い大きな百合があつたつけ。折から千葉の交際(といふのは土地の人たちが彼女等出稼の農婦を指す呼び方であるといふ)が他の農作物と一緒に山から折つて来た白百合を持つて来たといふので、ある朝起きて見るとその苔を二三十本も買つてある。五錢で買つたといふ。ひよつとすると自分が白い百合、白い百合といふので頼んで採つて來させたのかも知れない。この苔も咲いたのを見ると自分の考へてゐたものとは違ふ。輪も稍

小さいし、瓣のまんなかの黄色いところも狭い。これが普通の山百合といふのか知ら。笹の葉のような葉つばをしてゐるので家内の地方では笹百合と呼んでゐるといふが關西一帯や紀州の方では何といふのであつたか知ら。それから自分の思つてゐるような大きな花のは何といふ名の百合か知ら。と考へてゐるところへ階段の中のをどり場から見下すと裏の家の庭にたつた一輪ではあるが、自分の意中の百合が咲き出してゐる。頗るねたましい。唯一輪だし、それも大切さうに竹の杖までしてゐるから所望するわけにもいかぬ。何といふ種類だか名前を知る位のところであきらめるより外あるまい。三好(達治)と話してゐるうちに僕のいふのは爲朝百合の事であらう。伊豆地方には澤山あるから來年までになら手に入れる方法があるといふ。そのうちに井伏(鱒二)が來てもつと確實に手に入れてくれるはずになつた。伊豆では爲朝百合と呼ばないで島百合と呼んでゐる。皆採つてアメリカへ輸出してゐるから土地の知人に頼んで送つて貰つてやらうといふのである。これも蓮と同じくやはり來年のことになる。幾分氣に入ら



ないでも千葉の百合で我慢して置かう。幸ひその苔がたくさん咲いて、なかには見事なのがある。そのうちの二輪をベランダへ生けさせて寫すことにした。

芭蕉の大きな葉（今年の葉は何故か特別に大きくて平年の倍以上ある。また花が咲かなければいいが、何、咲けばこれも描くからいいや）のかけになつてゐる窓の椅子に腰をおろしてそのテーブルに店をひろげた。今この原稿を認めてゐるこのテーブルである。南向きの窓を隙けるといふ風が入つて甚だ涼しい。この窓を背にして花を寫してゐると苦熱をまるで忘れる。

在北支の將兵に對して相濟まぬといふほどの氣分になる。まさに半日清閑半日仙であると満悦最中のところへ老父からの手紙がとどく。鐵道の裁判の件や、奮起して傑作をものすべきゆゑんなどが記されてある。さすがに文化勳章をともし藝術院へとも鞭撻はされないが、傑作の一事は甚だ苦しい。自分の氣に入つたものも當分はまだ出來さうもないが衆評の傑作とするものはなほさらのこと出來さうもない。自分は夙にそんな名聞に飽和してゐる。たゞ老父にかう鞭撻

されるのは心苦しい限りである。この手紙を見てから折角の清涼も去つてしまつて畫興も一時に衰へた。花は略出來て葉つばにとりかゝつたところであつたが葉はとんと出來そこなつた。いけないと思つたら背景はさらに駄目になつた。まあ花だけは二輪ともいくらか増しなつもりである。葉を直さうと思つてゐるうちに翌日はみな枯れてしまつた。

この後二日ほどして増田涉が來たから序に見せたら増田は葉つばの枯れ葉などが面白いと評した。その後二日ほどして富澤（有爲男）が來たから見て貰つた。彼は自分のことを文學の方で師匠と呼ぶので自分も彼を畫の方で師匠と呼ぶことにしてゐる。さすがに師匠は百合を見て花をよしとし、背景も先づよからうと難が葉にある意を洩した。しかし自分は背景が最も悪いつもりで、背景を工夫したら葉も幾分見直すのではないかと思つてゐるが、繪に關してなら自分は何と言つても一々謹聽してゐる。況んやほめてくれたなどに對しては一言半句たりとも異存なく受けて置く、繪の批評ほど人さまざまなものもないので、全く十人十説である。心

細いほどであるが、それだけに十人の人がそれ／＼の意見でほめてくれた部分だけを集めると、どこも悪いところがなくなるような有難い結果にもなる。

すでに文學によつて分不相應な名聞を得て飽和状態にある自分はこの毀譽からは出来るだけ脱れて自分勝手に遊び楽しみたいものである。餘技といふ意味ではない。たゞ童心をもつてこれを行ひたいといふつもりである。童兒の如く眞剣に、無邪氣に、満足し謙虚に、といふつもりである。

一昨日偏奇館の先生へ暑中見舞に参上したら前栽に鈴懸の樹下の百合が満開で絢爛を極めてゐた。位置も自分のおぼえたより左手に寄つてゐるし花も白ではなく赤かつたから、念のため伺つてみたが白い花はないとお話で、やはり食べる百合根の残つたのをいけたのだと仰言つてをられた。その歸途いゝ風景を見つけたが、まだ寫しには出かけない。明日にでも寫しに行きたいものである。炎天の二時、三時ごろに面白い明暗を見せてゐたが、幸ひ日蔭のあるい

ゝ足場である。たゞ十五號ぐらゐの大きさを要するのが少々重荷らしい。でも二三日通へば曲りなりには出来るだらう。そのうち紀州へ歸つたら海でも山でも描き放題だから子供を老父母のところへ初旅につれて行く序に存分に描いて來よう。尤もその前に納税の事を果しまづ旅費や繪具代などを拵へてかゝらなければならぬ。

一つ進軍歌でも作つて當てたいものだ。そんな事を思ひ出したら急に暑くなつちやつた。もうペンを持つてゐるのもいやになつた。どうれ庭に打水でもしてやらうか。

## 澤東綺譚を読む

澤東綺譚は現代日本にもまだ藝術が残つてゐたのかといふありがたい感激をしみじみと味はせる名作である。尤も作者が荷風先生であつてみればさして奇異な事件ではないし、先生の作に對して我等は今更、贅語を重ね冗句を連ねて讚美することの分を失する所以は野人ながらも心得ないではない。但、編輯者酒匂君の言によれば、世上澤東綺譚を愛誦するものが多いのに遂にその眞意を解する能はざるが如き奇觀を呈してゐる。足下、啓蒙のために一言を費すに意がないかと、自分は酒匂君が我等を誘ふ辭の巧妙なのに感じながらも、澤東綺譚のやうな流麗

の文明快の想を読み誤る讀者があらうとも信じ得なかつたから、酒匂君の言に對しても實は聊か疑を抱かぬではなかつた。然るに偶今朝の朝日新聞に河上徹太郎氏の二つの抒情小説の論があるのを讀んで酒匂君の言の我を欺かざるを知つた。河上君の説の笑ふべき所以は別に近日朝日紙上にこれを細説する豫定であるから、今は河氏を眼中に置くことなしに管見を披瀝したる。

澤東綺譚は果してそんなに難解な小説であらうか。若しこの種の言を爲すものがあるとするれば恐らく荷風先生の小説を多く讀まぬ近頃の讀者で、先生の作はせいぜい「つゆのあとさき」か「ひかげの花」ぐらゐよりは知らないからであらう。この種の讀者で眞に澤東綺譚の魅力を感じた人は、我等が管見を見るに先つて荷風全集六巻を精讀して自ら悟ることが肝要であらう。その勞を惜しむやうでは遂に眞の文藝愛好者ではない。もしこれを座右に備へることだ出來ないとしても、せめては、澤東綺譚を改めて精讀するだけの事は是非ともするのが、作者に

對しても當然の義務であらう。作者はこの義務を果す忠實な讀者に酬ゆるためには懇切を極めた用意を盡してゐるからである。この作の出來た由來や、さては作者が好んで陋巷と賣色の婦とを取材する所以のものをもかんでふくめる位事細かに説明してゐるからである。

「わたくしはこの東京のみならず西洋に在つても賣笑の巷の外、殆そ他の社會を知らない」と云つてもよい。其由來はここに述べたくもなく、又述べる必要もあるまい。もしわたくしなる人物の何者たるかを知りたいと云ふやうな醉興な人があつたら、わたくしが中年のころにつくつた對話「晝すぎ」漫筆「妾宅」小説「見果てぬ夢」の如き惡文を一讀せられたなら思ひ半に過ぎるものがあらうと記して全集をとば言はずほんの三篇を數へただけであるが、荷風先生は近來の讀者の不忠實はよく御存知だから「それも文章が拙く、くどくどとして、全篇をよむには面倒であらうから、へとあらぬ罪の責を自ら負はれて」ここに「見果てぬ夢の」一節を抜摘しよう「かく懇切を極めてゐる。」彼が十年一日の如く花柳界に出入する元氣のあつたのはつまり花

柳界が不正暗黒の巷である事を熟知してゐたからで。されば若し世間が放蕩者を以て忠臣孝子の如く賞讃するものであつたなら、彼は邸宅を人手に渡してまでも其賞讃の聲を聞かうとはしなかつたであらう。正當な妻子の偽善的虚榮で、公明な社會の詐偽的活動に對する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳せ赴かしめた唯一の力であつた。……」この作者が表通よりも陋巷を愛する所以も略同じであらうが、篇中別にこれを記して「端無くも銀座あたりの女給と窓の女とを比較して、わたくしは後者の猶愛すべく、そして猶共に人情を語る事ができるもののやうに感じたが、街路の光景についても、わたくしはまた兩方を見くらべて後者の方が淺薄に外觀の美を誇らず、見掛倒しでない事から不快の念を覺える事が遙かに少ない……(下略)……」の一節があつた。嚙んでふくめるやうにといふのはこれ等を指していふのである。社會の虚偽を憎み人生の眞を求める態度は先生が年少時の處女作「地獄の花」一篇によつて早くこれを力説したところであつた。實に先生が文學の核心を爲すものである。こ

の義憤と人間愛とが先生の文學の基調になつてゐる。他は皆、裝飾的要素であつた。然も先生の作として最も枯淡の域に達した溼東綺譚にあつては先生のこの文學精神は舍利になつて殆んど露出してゐるかの觀がある。この篇の主人公が何故にお雪といふ娼婦を愛したか。彼は彼女を愛すること最も深く、彼女の性情の純眞を愛し、これを良家の婦とすることによつて彼女の後半生を「教ふべからざる懶婦」か「然らざれば制御しがたい悍婦」たらしめることを虞れたからに外ならない。先生が文學精神を先づ理解することによつて溼東綺譚は正當に了解されるであらう。これ等の義憤と人間愛との精神の熾烈の外に、溼東の地誌的興味を加へて季節感的確豊富な把握が先生の他の篇同様に亦この篇の大きな特長になつてゐる。先生が日和下駄の著者であり俳諧を産んだ東洋の文人たる所以である。

かくの如く説いてもまだ人をしてこの篇に會得しにくいものがあるとすれば、それは篇中に別稿失綜を挿入した一事にあるかも知れない。この手法は既にホフマンのカーテルムル以來近

くはアンドレ・ジイドなども好んで用ゐて作の効果を擧げてゐる。否、荷風先生自身が既に雨蕭々（溼東綺譚の現れるまで先生の代表作であつた傑作）によつて同工異曲の趣を示してゐた。小説といへば自然主義流の平板な敘法と描寫とより外に心得のないわが國の讀書界も寔に幼稚な困つたものである。然らば一見氣まぐれに見えるこの手法はこの篇に於いてどんな必然性があるか、失綜の作中の世界を研究する目的で溼東の地にお雪を見出すといふ序の筋を爲すばかりか、本筋の單調を補ひ、一種立體的な効果を生じて心理主義文學の妙趣を發揮せしめ對話「晝すぎ」漫筆「妾宅」等の作者たる「わたくし」が、お雪によつていかかはしい書物の製作者或は賣捌人と誤解される事情などと對照して作者たる「わたくし」が二重人格化して奇異な客觀性を生じるのを味はせる。更に一篇を讀了して孤獨なる老文學者たる「わたくし」大江匡の悲愁の生涯と妻子を持ちながらそれ故に生涯の不幸と孤獨とに悩まされて家庭脱出策として失綜した「失綜」の主人公種田順平とはその境涯を全く別にしながら、その不幸と孤獨と

の殆ど相等しいのを知る時我等は人生はたとひ如何様に處するとも遂にかくの如く孤獨にあらざるかといふ荷風先生の歎息を耳にするかの感が深い。種田順平が事にはじまつて、大江匡の「わたくし」に終る物語を一貫する感情が、篇の首と篇の尾となつて相應呼してさらにその訴を強めるかの觀を呈し表現を強めてゐる。失綜の挿話を篇中に點出し交錯する妙の極まる理由である。

一見平淡流麗なこの一篇は、この畸形な形態を以てして内にかの堂々たる精神を含んで無限の筆力を發揮してゐる。

最後に筆者が常に荷風先生の高作に接して殆んど例外なくこれを發見して心私に疑問を抱く點がある。荷風先生はその全作品、尠くもその抒情的な趣のものには殆んど一つの例外もなく強いて例外を數へれば冷笑に於てはそれが七人の分身になつてゐるが、多くは殆んど同じ性情の人物が必ず二人出て、この二人はいつも決して「即興詩人」の彼等の如き對照を示さずに寧ろ

甚しい類似性のみを見せて、而もそれが澤東綺譚中の大江と積田との如く作の効果を擧げてゐる事實である。假りにこれを名づけて形影相隣型とでも名づけて置かう。この篇では大江が更に二種人格になることで形影相隣が更に重複した妙がある。千篇一律とも云ふべきこの型は何によつて生じたか、必ずや先生の意識の底深いところにひそんでゐる必然の理由があるに相違ない。さうしてこの神秘を發見しさへすれば更に一段と先生の文學の秘鑰を握るわけであらうと思ふのに、不幸にも菲才にして我等は未だ遂にこれを謎を解くに到らない。

個々の人物風物の描寫や會話の妙などの生々しいばかりに精彩を放つてゐる實例などは列擧するに煩はしいからこれを省略に附したが、これ等細部の妙所も或は爲永春水に學ぶところが多かつたのではないかと考へられるのは、一日先生が筆者のために特に春水が作の至妙はその全篇の骨子にはなくて思ひがけない細部にあるといふ例、その一例は先生が隨筆萬茶亭の夕（中央公論新年號）の後に附せられた「町中の月」の一篇にこれを示して居られる類のものを多

く數へ上げて垂教せられたのを忘れないでゐる上に、澤東綺譚の三の終に近く、「爲永春水の小説を讀んだ人は、作者の敘事のところどころに自家辯護の文を挿んでゐるのを如つてゐるであらう。云々……」の一節がある事によつて窺ふことが出来るが、言はばこれらの春水流の低徊趣味が本篇では終始一個の主要な裝飾要素になつてゐることをも注して置きたいものである。その最も著して例は十の後半で、「澤東綺譚はこゝに筆を擱くべきであらう。然しながら若しこゝに古風な小説的結末をつけようと欲するならば、半年或は一年の後……」とある一條の如きを指すのである。「萬葉亭の夕」は本來澤東綺譚の最後の部分であつたものを割愛して便宜上獨立させたといふのは直接先生から伺つたところであるが、やはりこれを篇末に添へて讀む方が、兩篇相待つて興味も津々作意も明瞭になるものを覺えた。

河上君はこれを抒情小説と呼んだが自分は別に失戀小説の最も斬新なものとしてこれを見、この失戀小説は決して單純な抒情小説に非ずして寧ろ思想小説であり、またこれは河上氏も説

くが如くの所謂「私小説」ではなく社會小説たる所以を更に明にしようと思ふが、これは河上氏が朝日紙上に意見を發表された因縁もあり、自分も同紙上に掲げて同紙の讀者に見られたいと思ふからここではこれらに關しては言を費すまい。但、併讀を希望するにとどめて擱筆する。末世の僧の祖師を賣る者、妄言多罪。

## 荷風先生の文學

その代表作「溼東譚綺」を読む

### 1

溼東譚綺は材を墨水の東畔の陋巷の地に賣色の婦に取つた或る夏の記で明月の候に到つて局を結んでゐる。その土地、その世界、その季節、飽くまでも偏奇館文學の大集成にふさはしい偏奇館藝術の典型的な作品である。

先生が好みの時と處と人とを配合して天衣無縫の妙を發揮したばかりではなく、その情感の深さ文學精神の毅然たる高さに於ても亦優に先生が一代の名作たるを失はない一篇で、後世の文藝愛好者をして永く昭和の老才人を追慕するの料たらしめるとともに、現代の具眼者をして

は明治の末期に一代を風靡した作者が老來その藝術を渾然大成したのをまのあたりに見るの喜びに堪へぬのを感じしめるに足るであらう。

従つて我等門人たるものが冗雑な辭を連ねて先生を煩はすのは寧ろ慎しむべきであると感じないではなかつたが、此平淡流麗な文を以てした明快な構想の讀者に對して懇切を極めてゐるにも不抱、この至醇の味がまだ眞に味はれてゐないかと疑はれる惧があるので、先生が作意の眞には到底觸れ得べくもないまでも、一般讀者に對しては或は斯文を解するに幾分の役に立たうかと思つて拙文を草して見た。

「すみだ川」は人も知る如く先生が久戀の地である。國土の季候は夏から秋にかけて、或は夕立、或は暴風雨などによつて、最も變化に富んだ時で、先生は既にその名作「雨蕭々」をはじめ、その他幾多の小品雜筆に好んで描かれたところである。陋巷と商女とは夙に「あめりか



物語」の當時から、或は「支那街の記」或は「夜の女」などがある以外に、外遊以前にも既に「夢の女」に賣色の婦を描いたものがあつた。陋巷は歸朝後早速「監獄署の裏」があつた外、或は長篇の部分に、一々これを枚擧するに違もない。といふよりも先生の述作の重なるものから陋巷趣味とも名づくべきもの見出されない篇を捜し出す方が困難な程である。

實に陋巷と商女とこそは先生が生涯の題目である。といふよりも先生が文學精神はこゝに發生し、こゝに成育して今もこゝに宿つてゐるといふべきであらう。

然らば先生は何故にそれほど深く陋巷と商女とを愛惜するか。これに關して先生は從來幾度か記して居られるが澤東篇中でも改めてこれを解説すること懇切を極めてゐる。「七」の一節で「見果てぬ夢」からの抜摘を以てこれに代へたところがその一であり、また「八」の一節に「端なくも銀座あたりの女給と窓の女とを比較して、わたくしは後者の猶愛すべく……街路の

光景についても」とある一段約六百五十字にも亦顯著である。

また「九」の一節に窓に坐つて客を待つてゐるお雪と窓外の「歩みを此路地に入るや假面をぬぎ矜持を去つた」嫖客達とが「溝つ蚊女郎」「芥溜野郎」と相罵つて相戯れるあたりや、さてはお雪が大江匡を淫狼の書畫を商ふ者と誤認して親愛の情を致すことを記すあたりにも先生が陋巷と商女とを愛するの眞意が言外に溢れてゐる。

否、全篇終始一貫して有機的に流動して作の空氣そのものがやがてそれであるが、それを看取することが出来ないかも知れない人々のために敢てこれを要約すると、賣色の婦と陋巷の地とが能く社會的虚偽の侵すところとならずに人性本來の眞に本づいて生活してゐるのを先生は愛するのである。

洵や社會的虚飾に對する烈々たる義憤と、能くこれを脱却した者に對する愛惜及び社會の虚飾のために犠牲となつた個人に對する翕然たる同情とこそは、荷風先生が文學精神の精髓で、

自餘はこの鬱然たる根幹に發した花——裝飾的部分である。

2

社會的虚偽に對する義憤、本然の人間性の愛惜追求、思ふにこの精神こそ眞のヒュウマニズムで、文學の大道であらう。荷風先生はその陋巷趣味にも拘らず、文學の世界では久しくこの大道を濶歩しつゞけた。「地獄の花」一篇で先生は夙にこの文學精神を樹立し發揮した後、ふらんす物語の「霧の夜」、新橋夜話の「五月闇」など皆、先生が少壯氣鋭の日の作だけにその精神が比較的顯著に、まともに——といふのは受取やすく——出來てゐる作であつたが、その後この精神は毫も變らないながら、あまり多く露呈することなく、常に作の背後に燃えてゐた。へ時は反語的な現れを以てした事もあるが、かくて先生の文學をいふ者も多くは先生の高雅哀艷な裝飾的部分を先づ注目して、その根幹を知る者もなく偶先生の文明批評と寫實主義とをいふ

人はあつても、其由來を尋ねて先生のヒュウマニズムに着目する批評家は絶無で、久しく徒らに本末を顛倒した定評「享樂主義者」「世を拗ねた人」「戯作者的」などの語によつて先生が文學の眞意は葬り去られ、遂に皮相だけしか味はゝれなかつた。河上徹太郎君の如きも、この先人の文壇常識的偏見に煩はされたか、遂に澤東篇を讀破することが出來なかつたと見える。

澤東綺譚は最も隱微のうちにはあるが、最も力強く深い感情を伴つて、そのヒュウマニズムを現はした。このヒュウマニズムを先づ掬することなしに河上君がこれを一篇の抒情小説と見なして、復しても本末顛倒の愚を演じ、我等をして好漢未だ文學を學ばずと歎ぜしめた。私小説と斷じなかつたのがまだしもであらう。

澤東綺譚は警拔に悲痛な失戀小説には相違ない。従つて荷風先生本來の一特色たる豊富な抒情の好もしさに欠ける筈もない。寧ろ嫋嫋たる余韻を作者自ら持てあますかとばかり。だが然

し、果して單純に抒情小説と見るべきものであらうかどうか。

この失戀は作の全篇の効果を高潮させるための重要な部分ではあり、その構想の一焦點をなしてはゐても、失戀その事がさのみは作の重要素でないと同じく、それに伴ふ抒情もいほどの篇の裝飾的部分であらう。尠くも老先生が意圖は必ずしもこゝには無かつたであらう。

然らば先生が意圖したところは何か。臆測するに、世態人情の推移に對する興味、又、現代の要求によつて産れた下層の賣色の地に對する地誌的、或は風俗史的興味など、凡そ抒情小説とは全く反對に、寧ろ客觀的な報告文學の類ではなかつたらうか。尠くもその體を採つてゐる。事實に即したと思はれる生々しい趣と、先生が特にこれを新聞紙に寄せ、先生の所期の如く慌しい紙上で特に生彩を放つた事實などからの測定である。

お雪と幾分は對照する現代風の女、すみ子が活躍する挿話「失踪」が篇中のところどころ

にその一端を現して本筋と交響する工合や、冒頭先づ活動寫真といふ廢語使用から淺草公園に出たポン引の「絶好のチャンスですぞ、獵奇的ですぞ」「知らない吉原へ行くのだ」の對話や、吉原の古本屋での見聞など、層層として時代の變遷を痛感せしめて過去を追慕する念に堪へないところへ、過去の幻影の如く夕立の傘のなかへ、古風に結ひ立ての髪なつかしく、しかも鳴神を恐れて出たお雪など抒情的色彩などはまだけぶりにも見えないほんの「日和下駄」風の淺草見聞記である。

其後もしばらくは玉ノ井見聞記がつづくうちに偶々お雪が大江匡を日かけ者と誤認した結果が、恐らく文學史上空前な失戀小説の色彩を帯びて來て、同時に先生の文學精神も冴え渡つて來た。殘冬雜記などとともに、新「日和下駄」を成すかと思つたこの一篇は小説風の世界へ入ると、殆ど同時におしまひになつた。「失踪」は途中から筋も失踪するし、お雪匡の情話は序曲でもうおしまひ。後には作者の抒情らしいものがエピソードになつて漂つてゐるだけなのだか

ら批評家がまごつくわけである。

3

もともところちらで氣のある商女が生涯おそばにと水を向けると同時に、嫖客が彼女から遠ざかつて自ら進んで失戀するといふのは實に奇想で、正に綺譚と銘を打つに足る。大江匡は何故にお雪から遠退いたか。名譽ある老年紳士をお雪は壯年の日かげ者と誤認して受慕してゐる。古風にも彼女が昔日の愛人にさながらの風貌によつてである。(此あたり先生としては珍しくユーモアと温かさがある)大江は既にお雪が風姿の可憐を認めその性情の美の共に人情を語るに足るのを知つて、三月ばかりも通つてゐる。普通ならば當然、奇貨遣くべしとして好んで箕帚を把らせるべきところを、大江はこは一大事と、こそこそとお雪から遠退いてしまふ。其理由は何か。ここにその篇の眼目がある。即ち溼東篇のクライマックスは九の一章に盡きてゐる

と見てもよいのである。前後は言はばこの一章を効果あらしめるための基礎工事と外廓の仕上げなのである。

大江匡はお雪を眞に愛してゐた。誤つて彼女を良家の婦にすることによつて「一變して教ふべからざる懶婦となるか、制御しがたい悍婦になる」のを惧れたのである。これは大江の過去が彼に教へた分別であつた。

交番に對して一種の強迫觀念を抱いてゐるとも見える大江は、思ふに、家庭が所謂善良な實は虚飾に充ちた社會を形成する第一歩であり、社會虚偽を強ひるか、然らずば人間の自由を奪つて本然のまゝに生きしめないのを知つてゐるからに相違ない。

従つて篇中權力を以て社會の虚偽的秩序を強制すると見るべき機關に對する嫌惡恐怖の念が一再ならず表現されてゐる。ともあれ大江は、その處を得て快活な性質のままに陋巷に賣色の生涯を送つてゐるお雪を眞心から愛してゐる故に、彼女を墮落させるに忍びなかつたのである。

(荷風先生の倫理を以てすれば陋巷に笑を賣るにことは墮落ではなくて、眞の墮落は懶婦となり悍婦となつて所謂良家に主婦たるにある一事を此際忘れてゐてはなるまい。)乃ち大江匡は自己の所信によつて自ら彼女を失ふ苦痛に堪へて彼女から遠ざかる決心をした。——殉教者の如くである。然も眞に彼女を愛するが故に彼女の願望を拒む所以を彼女に會得させる術を見出さない。もうユーモアの沙汰ではない。この思想上の隔絶が一段と悲痛である。

年齢の相違、境遇の相違、さうして最後に思想の相違とかう重ね重ね自覺しては、大江は疑ふまでもなく、まのあたりにお雪を見ながらお雪とは別の星に住む思から別の生物のやうな感じにまで達したに相違ない。このさびしさの訴は慣用に從つた抒情などといふ言葉では盡されまい。一個人の私情もここまで追ひこんでしまへば主觀ではなく、既に嚴然たる客觀的存在になる。これが文藝の極致、かくてこそ眞の創作である。

その名をも問はずに一度立別れてしまつたらば、再會を期しがたい浮萍に對する生別の情を

抱いて街に出た大江の無帽の髪を、眞向から吹きみだして無花果と葡萄棚とに吹き立つ初秋の風は、紙上にも颯々の音を通はせて、人の身の、それも作中の事ながらわが心にしみ入る思がある。かくてこの篇には言はば新らしい「さびしをり」のやうなものが漂うてゐる。かつて「葡萄棚」の一篇によつて少年と賣色の少婦とを寫した先生はあやしい美しさを示したが、今は老主人公を描いておそろしいさびしさの訴へを見せた。中絶した挿話「失踪」のすみ子はお雪さんと對照する人物であつたが、失踪の種田は大江匡の分身として、殆んど大江と同じ型の性格が別の世界の、別の境涯に家庭と妻子とを持ちながら、孤獨に蝕まれてゐるのは、正に形影相隣の趣で、所詮人生はいかなる生き方によつても、孤獨であり、なつかしい過去にいたましく支配される現在であると説き顔の先生の人生觀をその篇首と篇尾とに遠く照應させてゐるのを見る。要するに、時、處、人、主題、みな先生が年來の好みに執したお誂向きのものばかりの取合せが、その調和の加減の複雑微妙、その立體を成す効果の高き深さに自ら大作の貫祿

を見せて中篇ながらも先生の代表的雄篇として見るべきもの。在來仰いでゐた「雨蕭々」に似て更に心ゆくものたるを覺える。生等が解し得る限りである。妄言當死。

— はり —

むささびの冊子

定價貳圓

刷印日 一月一十年二十和昭  
行發日 五月一十年二十和昭

納本  
檢  
印

著者 佐藤春夫  
發行兼印人 渡邊久吉  
製本者 辻重造  
京都河原町二條下ル  
京都河原町二條下ル  
京都河原町二條下ル

發行所

京都市河原町二條下ル  
振替〔大東〕  
大東 八六五九番  
八六五九番

人文書院

浦和高校 藤田徳太郎著

近代歌謡の研究

菊判五〇〇頁・價二・〇〇・送〇・三三

明治大學 塩田良平著

山田美妙の研究

菊判五〇〇頁・價五・〇〇・送〇・三三

東京高師 風巻景次郎著

新古今時代

菊判六八〇頁・價四・五〇・送〇・三三

川田 順 著

俊成・定家・西行

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

初校が終つてから、加筆改竄に一ケ年半を要して出来上つたもの。教授が學位論文のつもりで、精魂を打込んだ書。稀觀の原色、凸版、寫眞百余。近代歌謡は吾人の生活と連鎖多き故、一般の讀者にも、好事家にも向く。限定三百部。賣切れの恐れあるも増版せず。

明治の文壇に巨火を翳した山田美妙の個人研究の完璧である。こゝ同時に明治文壇の側面史である。こゝは云ふ迄もない。著者塩田氏は云ふ迄もなく、國文學者として藤田、風巻、森本氏等と共に次代に君臨する俊英であり、夙に明治文學研究家としての權威でもある。

次代の國文學界を双肩に擔ふ第一人者として學界から囑目されてゐる著者の第一著である。「新古今集」「作家篇」「文獻篇」に三大別され、その考察吟味の哲學的であることは、風巻氏の恐るべき頭腦のよさを雄辯に物語るものである。

著者川田氏が、新古今時代研究の先覺者であることは言を待たず。本書に收むるは、俊成・定家・家隆・西行・慈鎮・良經に對する縦横の評論と名歌鑑賞と「新古今」萬葉集「藤原家隨論」「西行傳記歌鈔」等で幾多の新説と示唆を藏す。

發 兌

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番 人 文 書 院

院 書 文 人

慶應大學教授 川上 漸著

寒 燈

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一〇

大阪朝日新聞 論說委員 藤田進一郎著

時代を歩む

四六判三五〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

東大助教 文學博士 金田一京助著

學窓隨筆

四六判三二〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

飯島曼史著

見る讀む想ふ

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

世に隨筆書は多い。けれどほんとうの隨筆は前へるものが、果してだけあらうか。著者は前年隨筆「斷弦」を出して、洛陽の紙價を高からしめ、隨筆の醜味を鮮明して、讀書界に一大センセイシヨンを與へたる人。この人にしてこの著ありと云ふべきである。年に四季あり然も三伏の暑來らんとして寒燈を世に送る何のアレゴリぞ！

生馬の目をぬく世界隨一の大都市ニューヨークの特派員として、令名を馳せた著者は、今や大阪朝日の「新知識」として「頭腦」として論說委員として活躍してゐる。本書は著者の該博な智識と、趣味の豊富を雄辯に物語る。

親友であつた情熱の詩人石川啄木のパーソナリティイヲ左右する偉大な影響を與へた金田一博士の隨筆集。博士の隨筆ほど迫力あるものはない。その中等學校教科書に轉載されてゐるものなどは、何れの學生も涙を流して讀むと云ふ。もつてその内容を知るこゝが出来やう。

神戸の商大教授から、大朝論說委員に轉向した、學者であり同時にチャーナリストだ。下村海南博士と共に著の「南遊記」に依り、その滋味豊かな行文を喧傳された著者。本書はその著者を知ることが出来る得意の隨筆集である。

京都帝大元 講師理學士 東 光治著

萬葉動物考

菊判五二〇頁・價四・五〇・送〇・三三

折口信夫 博士序文 高崎正秀著

萬葉集叢攷

菊判三二〇頁・價二・八〇・送〇・二四

佐々木信綱 序文 齋藤 瀏著

萬葉名歌鑑賞

四六判三〇〇頁・價一・八〇・送〇・一五

國學院 大學教授 高崎正秀著

金太郎誕生譚

四六判三九〇頁・價二・五〇・送〇・一五

萬葉動物は廣く同時代の文獻や遺物を調査し、萬葉植物とも對照して、當時の生物の生育状態を推定した上、その名の由來を究め、更に現代の動物分布や季節變化を考慮して判斷を下したのが本書。著者専門の動物生態的見地から、新しい解釋が施された該方面に一新生命を拓いたものだ。

萬葉集——この日本思想の精華とも云ふべき——は唯だ文義的乃至は文字的解釋では解決出来るものではない。この意味から、わが高崎先生は、これを民族學的に研究しつゝある學者として特異の立場にある。初めて世に問へる第一著である。

歌壇の大御所佐々木門下の逸才たる著者が、卅年の努力と精進に依つて成つた、萬葉四千五百首中の名歌を鑑賞したものだ。萬葉と云へば難澁な面白くないものさされてゐたが、本書の出現に依つて甫めて大衆化された。敢て凡ゆる階級の人々にすむ。

曾て、坪内逍遙博士が在世中、本書の冒頭を飾る「金太郎誕生譚」を讀み、當時未知であり白面の教授に熱烈な讚辭とその精進を激勵したこと、このことが出来やう。各篇の優れてゐることを立證する新國學樹立の基礎、明日への國文學研究の規範だ。

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 丹 波 丸 番

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 丹 波 丸 番

院書文人 兌發



文學博士  
佐佐木信綱著

### 歌がたり

四六判三三〇頁、價二〇〇・送〇・一五

萬葉と和歌の研究に全生涯を打ち込み、輝かしい初代の文化勳章受領者となつた博士の、この喜びを紀念するための書だ。歌について、又、歌人について、縦横に筆を駆馳してゐる。歌道入門書として、派閥を超越した巨人の、この懇切、丁寧な書は、輝く文化章佩授紀念の恰好の書だ。

文學博士  
佐佐木信綱  
佐佐木雪子 共著

### 筆のまに

四六判四二〇頁、價二〇〇・送〇・一五

萬葉學者として、歌人として、日本の權威たる博士が、恰も夫婦の巡禮のやうな氣易い心持ちで、前半を博士が、後半を夫人雪子女史が、五十年の長い間、筆のまに／＼書かれた珠玉のやうな隨筆集だ。わが書院獨特隨筆。

佐佐木信綱序  
久松潜一序 佐佐木治綱著

### 短歌鑑賞の心理

四六判四二〇頁、價二五〇・送〇・一五

文藝の鑑賞に何等かの客觀的基準が與へられるなら、その研究に於て得る處が大であることは云ふ迄もない。この爲には、實驗心理學の助力を俟つて、種々考察されるべきである。その意味で短歌の鑑賞に心理學的方法をもつて考察したのが本書である。

再 岡山 巖 著

### 現代歌人論

四六判三三〇頁、價二〇〇・送〇・一五

短歌評論の第一人者たる著者が、十年間に發表した論稿の中から現代歌人を論じたもので、空穂論、利玄論、岡麓論、川田順論、文明論、茂吉論、憲吉論、牧水論、白秋の九篇。論、作兩様を完備する氏の歌人論は未だかつて見ざる獨創と傳説なるものである。

院書文人 發兌 京振 都替 市大 河阪 原八 町貳 二壹 條六 下參 ル番

東大助教授  
文學博士 金田一京助著

### 學窓隨筆

四六判三三〇頁、價二〇〇・送〇・一五

親友であつた情熱の詩人石川啄木のパーソナリテイを左右する偉大な影響を與へた金田一博士の隨筆集。博士の隨筆ほど迫力あるものはない。その中等學校教科書に轉載されてゐるものなどは、何れの學生も涙を流して讀む迫真力的麗筆。

恩地孝四郎  
前田夕暮著

### 顯花植物

四六判三四〇頁、價二〇〇・送〇・一五

夕暮氏は今更ら此處に絮説するまでもなく、歌壇の重鎮であり、特にその散文は、歌人らしいデリケートな感覺に依つてなされたもので、流石は大家であることを思はせる。本書は、最近の最も自信ある散文集である。

佐佐木博士  
序文 津輕照子著

### 手かきみ

四六判三三〇頁、價一八〇・送〇・一五

著者は現代日本の上流家庭を代表する、最も優れた女性の一入である。本書は其名筆になる隨筆集で、題して「手鏡」と云ふ。才色兼備、九條武子さんを思はせる女史が「手鏡」の如く愛惜おくあたはぬ名文集である。

小埜徳子著

### 山居

四六判三三〇頁、價二〇〇・送〇・一五

洛北大原の里、三千院前に四季茶屋を營む内侍の尼ならぬ美はしの優婆夷、小埜徳子女史は京の名物女性として、將た又、俳人、歌人、畫人として知られてゐる。山居十四年を斯道に精進した女史の隨筆集であり、半自叙傳だ。

院書文人 發兌 京振 都替 市大 河阪 原八 町貳 二壹 條六 下參 ル番

尾山篤二郎著

作歌道雑話

四六判三七〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

松村英一著

短歌管見

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

半田良平著

短歌詞章

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

岡山 巖著

寸感抄

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

作歌道雑話——少々専門的な名稱の嫌ひはあるが内容は多趣多岐、然も輕快洒脱、歌のウの字も知らぬ人も、企らまずして歌の眞諦を知り、不知不識のうちに現歌壇の全幅を會得する事が出来る。そのキビ／＼せる筆は流石に歌壇の彦左だ。

國民文學の重鎮たる著者の快心の書。著者を出すことを好まず、ひたすら斯道に精進してゐた氏が數年の沈黙を破つて世に問ふたのが本書である。西の川田氏とよき對照をなす勉強家である氏は、著書に對しても熱意に燃えてゐる。

「國民文學」一派の重鎮である著者はその性格の示す如く、實作者としても批評家としても、極めて堅實であり、眞摯である。流石に歌道の明暗を堅實に歩んで來た人だけあると思はれる。本書は歌論であり現歌壇の鳥瞰圖である。

名著「現代歌人論」の著者岡山氏の主宰する雑誌「歌と對照」に連載されつれに雑誌のアトラクシヨンとして、氏の歌人論以上に好評を博せるものである。歌人として批評家として、更に文明評論家として鋭い感覺に依る縦横の隨感隨想録である。

卅一版

大阪朝日論說委員 釋 瓢齋著

俗つれづれ

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

大阪朝日論說委員 釋 瓢齋著

瓢齋隨筆

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

大阪朝日論說委員 釋 瓢齋著

それからそれへ

四六判三五〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

大阪朝日論說委員 釋 瓢齋著

俗人語錄

四六判三一五頁・價二・〇〇・送〇・一五

時に破邪顯正の斬馬劍を收め、貌姑射山に杖して俗腸を況ひ、歴史を探り、彩管をさる。或時は僧堂坐禪し悟道に精進する等・聖・俗・併せ呑む然も、天縱の四辯八音たる皮肉、洗練されたフモールは、その博覽強記詞藻豊富と相俟つて將に天一品だ。

これなら「瓢齋隨筆」を銘を打つても恥かしくない、著者自身がこつておきの題名をつけた劃期的の隨筆集が本書である。得意の短章に得意の横説、堅説は考證と相俟つて深根固柢、全く独自の境地を拓いたもの云へ。

大朝に在籍二十三年、その半を論說委員として、論陣の最高峰に位し、日々「天聲人語」に依つて百八十萬讀者に呼びかけた著者が、昭和十一年九月二十六日を以つて停年引退した。「天聲人語」洵に感慨本書は瓢齋の紀念すべき一大モニュメントとして世に送る。

「天聲人語」三千六百篇中より、翁の明歴々、露堂々躍如たる黄金篇百二十余を描いて本書を成す。優婆塞瓢齋の八斗才は個體として、時に提唱し、時に誨へ、變々たる光芒は太陽の如く、その光明は十方世界に遍照たり、これぞ翁が艾年の血と肉をもつてなる短章軌範でなくて何であらう。

院書文人

京 都 市 大 河 原 町 八 條 二 丁目 下 蔭 九 番

院書文人

院書文人

京 都 市 大 河 原 町 八 條 二 丁目 下 蔭 九 番

院書文人

大阪毎日新聞  
論説委員長  
井上吉次郎著

手ご足

四六判三〇〇頁・價二〇〇・送〇・一五

曾て文化史を飾つた工人と、その作品を訪ねて、  
工人とその作品たる陶器を文化史的にみた趣味の  
隨筆集だ。陶器に興味を持つた人々は勿論のこと  
陶器に興味を持たぬ人にも興味ある書だ。

大阪毎日學藝部長  
「風に聞く」執筆者  
井上吉次郎著

逆に

新四六判二五〇頁・價一五〇・送〇・一五

夕刊短評のカテゴリーと云はれる大阪毎日新聞の  
短評欄「風に聞く」に名筆を揮ひつゝある筆者が  
最近十年間その感光板の如き鋭敏な頭腦に反映し  
た諸々の社會相を描いたもの。眞のアンソロジー  
讀本であり、同時に社會、經濟、婦人讀本でもある

慈惠醫大教授  
醫學博士  
森田正馬著

再生の慾望

四六判四二〇頁・價二五〇・送〇・一五

博士は、他面讀書家として、將た又博識家として  
醫學界唯一の定評がある。その博士が、生きとし生  
けるものゝ願ひ、生の慾望を根幹として、醫學、  
哲學、文藝を織り交ぜた隨想、隨筆集であり、知  
識の寶庫だ。お座なりに大學を出るより、本書を  
讀まれよ。

慶大醫學部教授  
醫學博士  
川上漸著

斷絃

四六判三〇〇頁・價二五〇・送〇・一五

學者中の學者として、その風格を畏敬されてゐる  
博士は、他面漢籍詩文をよくし、陽明學に造詣深  
い。本書は博士が始めて發表した珠玉の文字であ  
る。その詞藻の豊かさと、趣味の高雅は「東京朝日」  
をして隨筆の王座と稱讚せしむ。

岸田國士著

時・處・人

四六判三四〇頁・價二〇〇・送〇・一五

戯曲作家の第一人者岸田國士氏の隨筆集である。  
氏の文學はそのフランス風の輕快な文章と、フア  
ン・ド・シエクルの憂鬱さがない處に、獨得の魅  
力がある。それ故に近代人は、氏の文學に通ずる  
ことに依り魂の綠地を發見することが出來やう。

荻原井泉水著

白馬に乗る

四六判三〇〇頁・價二〇〇・送〇・一五

白馬に乗る——如何にも夏の讀物にふさはしい。  
井泉水氏の文章はすでに定評あるものであり、こ  
こにその紀行文は他の何より興趣が一段と深い、  
それは唯の文章の士でなく、優れた俳人だから  
なのであらう。紀行隨筆中の白眉。

水野葉舟著

村の無名氏

四六判三六〇頁・價二〇〇・送〇・一五

關東震災で人生觀が變り、當時の天才水野青年筆  
を捨て房總の一寒村に無名氏として土に親んで來  
たが、そのつれづれにもした小品を蒐めたもの  
が本書だ。自然主義華かなし頃、天才作家と謳は  
れた著者が、十數年振りに世に問ふ珠玉の文章だ

中河與一著

文藝不斷帖

四六判四〇一頁・價二〇〇・送〇・一五

創作家としては、純文藝陣に萬たき姿を闊歩し、  
論壇では得意の偶然論を振り翳して論陣を席捲し  
つゝあるのが、わが中河與一氏である。それを裏  
書するもので、創作よりも何よりも中河氏を知る  
にもつともよい。

院書文人 兌發

京 都

市 大

河 原

町 八

二 條

下 六

九 番

院書文人 兌發

河井 醉 著

南 窓

四六判三三〇頁・價一・八〇・送〇・一五

詩壇の元老であり、同時に文壇のベタランである著者自選の隨筆集である。本書は唯だ詩人としての隨筆に止らず、文壇五十年の回顧録であり、プロキールでもある。詩人らしいデリケートの筆は、幽谷の谷間の蘭の様な氣品を持つ。

保田 與重 郎 著

英雄と詩人

四六判三三〇頁・價一・八〇・送〇・一五

文藝評論界の新人として、新浪漫主義を高揚しつつある著者の處女出版である。本書は發表當時著者の批評者としての位置を一步一步確實にした名評論のみである。その批判の犀利と俊鋭、スケールの大きいことは流石新人中の白眉だ。

醫學博士

岡田 強 著

文明と狂想

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

文明と狂想は一種のコントラ・ブントだ。現代人は多かれ少かれ、何等かの狂想曲を奏でてゐる精神病學に於ける新銳の士、岡田博士が多年の蘊蓄を吐露し、世の態を文學的興味深く叙したのが本書だ。

大阪毎日 調査部長 石川 欣一 著

ひこむかし

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

隨筆家として、新聞界に並ぶものなき著者が、或る時はロンドンにニューヨークに特派員として第六感を活躍させ、得意の快筆で讀者を魅了したことは世人周知のことだが、本書は歸來日本は勿論歐米の見聞を隨筆したものもが本書だ。

發 兌

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番 院 書 文 人

院 書 文 人

京大教授 近重物安 著

野 狐 禪

四六判三三〇頁・價一・五〇・送〇・一五

收むる所「崇佛の本旨」「お悟り」「禪と科學」「麻三片」「禪説」「偶感」等の外、詩を説き併を語り、畫を謂ひ、詩禪一味、輕快によく王三味の端的を舉し、月並宗匠の死禪話輕はなく時にまた諷刺縱横巧みに其信念と心境とを披瀝す。

京都帝國大學名譽 教授・理學博士 近重眞澄 著

雪 だるま

四六判三七〇頁・價二・五〇・送〇・二一

禪堂は勿論のこと陸軍海軍の將校連から、各専門學校として一般には、ラヂオ放送に―と到る處で噴々の好評を博した禪話、殊に信心銘講話は、最近天龍寺僧堂に於て講じた。博士の最も自信に盈つるものだ。

大阪朝日論說委員 釋 瓢齋 著

白 隱 和 尙

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

白隱和尚の史實を經として、得意の禪海秘密の暴露を縱として、これを小説風に書きたものが本書である。いはゆる公案禪の如何なるものであるかは本書に依りて瞭となつた。徳富蘇峰が激稱して曰く「本書は白隱に關する書中の書であらう」云々

近重物安 博士題字 野村瑞城 著

澤庵と不動智の體現

四六判四〇〇頁・價一・五〇・送〇・一五

禪門の巨人澤庵は又近世國民思想史上の一人者であり、官廷の歸依を得、且つ三代將軍家光の精神上の師であつた。殊に澤庵が柳生但馬守に與へた「不動智神妙錄」の一卷は劍の神秘に托して不動心の極意を啓示せるもの。

發 兌

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番 院 書 文 人

院 書 文 人

東京帝大教授 永井 潜著  
醫學博士

新刊四三〇頁・價四・五〇・送〇・二五

### 道と自然

東洋哲學の源流、老子は「道は自然にあり」と云ひ、又、近代哲學の大祖カントは「道は人にあり」と云つてゐる。「道と自然」は兩者の何れでもなく、それを止揚したものである。「自然觀より人生觀へ」から更に一步を進んだものが本書だ。

東京帝大教授 永井 潜著  
醫學博士

### 自然觀より人生觀へ

—ザインよりゾルレンへ—  
四六判四七〇頁・價三・五〇・送〇・二二

醫學者であり、哲學者たる博士の研究は、その思想の圓熟と相俟つて素晴らしい進展をみせてゐるザイン(存在)よりゾルレン(當爲)へ—博士は斯く叫びつゝ、全く無人の境を行くやうな闊歩をつゞける。本書は最近の醫學・哲學を論じた人生論であり、生命論である。

東京帝大教授 永井 潜著  
醫學博士

### 人及び人の力

四六判三八〇頁・價一・八〇・送〇・一五

天地に偉大なるもの多しと雖も「人の力」に如くないと大哲ソフォクレスは喝破す著者はこの偉大な「力」を生活現象に即しつゝ、生命の醫學・哲學・健康と凡ゆる方面に亘つて詳叙してゐる。蓋し醫學書であり同時に哲學書だ。

東京帝大教授 橋田邦彦著  
醫學博士

### 自然と人

四六判三四〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は自然科學者であり同時に哲學者たり更に、佛敎に造詣深いこゝは夙に識者の知る處である。その言々句句には巾廣き壓力を讀者の肺腑に感ぜしめ、然もその壓力のこゝ道に人に對して、不斷に燃え盛る蕭然たる愛と眞理を見出すであらう。

慈惠醫大教授 浦本浙潮著  
醫學博士

### 生命の第四原理

四六判五四〇頁・價二・五〇・送〇・二二

生理學界の權威、浦本博士の博識は既に定評がある。本書はそれを裏書するに相應しい書だ。内容を「哲學」「隨想」「評論」「紀行」の篇に分つ。その頭腦の透徹は旻天の如く、行文の妙味は全く獨自のもの、樗牛、鷗外、漱石の三者を打つて一丸としてそれに新思想を盛つた感がある。

慶大醫學部助教授 林 謙著  
醫學博士

### 刺戟

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は神經生理學者の專攻者で、ソビエツトに留學して歸つた新進學者のだ。自然科學者のうちで、隨筆家として一異彩を放つてゐる。博士の隨筆と生理學解説とを蒐めたもので、その若々しい筆致興味深い解説、野心ある思索は實に著者の獨壇場

慶大醫學部助教授 林 謙著  
醫學博士

### 思想と生理

四六判四〇〇頁・價二・二〇・送〇・一五

世界の至寶とされたソビエツトの大生理學者、故バヴロウ教授門下の俊逸であり、日本に於ける唯一人者慶大の誇りとする新進學者だ。のみならず今やその文名は噴々として文藝界に華々しい活躍をつゞけてゐる著者の最近の隨筆集である。

日大教授 内山孝一著  
醫學博士

### 涓滴集

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

新進の生理學者として、又ベンの人として夙にその名を知られてゐる逝水・内山孝一博士の専門外の第一著である。日大、昭和醫專等に教鞭をまゐりつゝも、尙ほ橋田教授のまことに研鑽を重ねつゝある學究者である。啓蒙隨筆として世にすゝむ。

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番

宮川 曼魚 著

### 花鳥風月

四六判三〇〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

著者は江戸趣味の濃厚な人であり、同時に江戸時代の研究者だ。花に鳥にさりごりの趣あり、風に月に、つきざる味はひのある隨筆集。清新にして幽婉、平明にして情趣ゆたかなる内容。その二十四章のいづれもが吾々の生活に即した尤も手近な話題であり、感興である。

醫學博士 式場隆三郎 著

### 文學的診療簿

四六判三一〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

わが式場博士を有名にした初めての書だ。本書は精神病理學者として、又文藝家として一人二役の隨筆集だ。然も本書は神経系統諸病者にとつては療病隨筆ともなる。

慈惠醫大教授  
醫學博士 浦本浙潮 著

### 旅心常住

四六判三七〇頁・價二・〇〇・送〇・二二

著者浦本博士ほど旅を愛し、旅に徹底する人はない。か、こに俚語をもこめ、こゝに歴史趣味を漁る鹿爪らしい教授や博士の肩書を、かなぐりすて一管の愛竹を腰に旅愁を感む。旅心常住！これぞ博士の旅に對する至純な心境でなくて何であらう。

慈惠醫大教授  
醫學博士 浦本浙潮 著

### 漫筆七部集

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

本書は題名の示す通り、著者が最も得意とする隨筆を七部門に分ちて取めたもの、その行文の流麗含蓄する多彩の趣味は、愈々冴えその筆致は益々油が乗つて、光彩陸離たるものがある。浦本イズムの低徊趣味様溢せるもの。

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 八 條 二 番 下 蔭 路

院書文人 兌發

慶應大學教授  
醫學博士 藤浪剛一 著

### 東西沐浴史語

菊判四五〇頁・價四・五〇・送〇・二二

二十年の研究と莫大の費用をかけて東西に亘る沐浴（風呂）に關するものを蒐集し、これを系統的に叙述したもの。日本に於ける沐浴の最高權威書である。圖書愛好家、好事家の垂涎する書だ。

大谷大學  
教授 泉 芳 環 著

### 印度漫談

四六判四三〇頁・價一・五〇・送〇・一五

「光は東方から、法は西方から！」—印度は實に精神文化の搖籃の地だ、この神秘の國を縱横に解剖したのが本書、その内容は植物、動物、風俗神話、佛跡、文學に亘り、然も一般讀者に興味を與へる爲の漫談の形で叙述す。

侯爵徳川  
義親序文 阿部徳藏 著

### 奇術隨筆

四六判、價二・〇〇・送〇・一五

徳川侯の序にある通り、阿部氏は奇術即藝術を考へてゐる。アマチュア奇術家であり、同時に學者だ。そしてその妙技は、畏くも幾度か台覧の榮を擔つたのだ。それ故に餘興や興業には絶対に出場せぬ。本書は學者として、藝術家としての阿部氏がその蘊蓄を筆にしたものだ。

帝國美術院會員  
日本美術院同人 富田溪仙 著

### 無用の用

四六判二八〇頁・價二・五〇・送〇・一五

綺羅さながら星の如き現代畫境にあつて、最も天才的なのはわが溪仙氏だ。それは獨り繪のみに限らない。その文、その書、その詩悉くが高逸であり同時に奇逸、風飄だ。特にその文章は形態に着せず。獨自のもので一種の禪語體を讀む感がある。

院書文人 兌發

京 都 市 大 河 原 町 八 條 二 番 下 蔭 路

院書文人 兌發

早大教授 吉江喬松 著

朱

線

四六判三三〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

氏の小品、隨筆は自然主義末期ごろには、すでにその右に出る者がない名筆家であつた。本書は氏の文藝隨筆であり、同時にエッセイでもあり博士の文學に對する態度、文學に携はる學徒としての氏の抱藏せるイデーを充分に知ることが出来る。

森田草平 著

一日の放樂

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

「煤煙」「自叙傳」の作者として、一世に轟たる衝動を與へた著者の文藝隨筆「生死を賭して」は「煤煙」の後日譚として、又隨所に漱石の秘話或は向陵の思出、樋口一葉のあた家に下宿してゐた事、其一文一章は讀者をして最後迄讀ませる。

京大教授 太宰施門 著

瑪

蘭

樹

四六判三六〇頁・價二・〇〇・送〇・一五

佛文學の權威たる博士は、他方歌舞伎研究家としても餘りに有名すぎる本書は學者としての著者の一面を、そして廣い意味に於ける文學者としての一面を、又多趣味な一面をと云つた風に、博士を多角的に知ることが出来る。

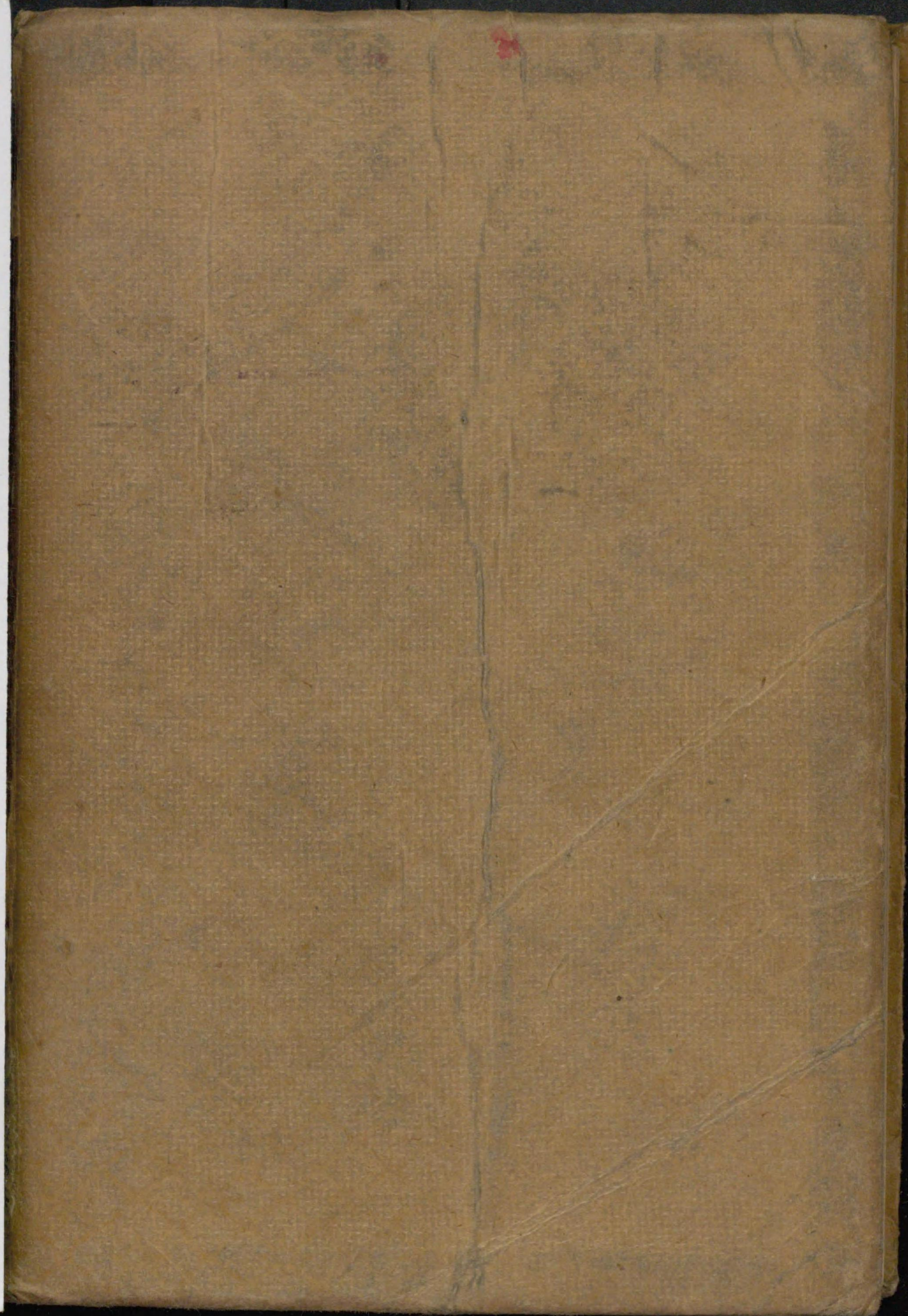
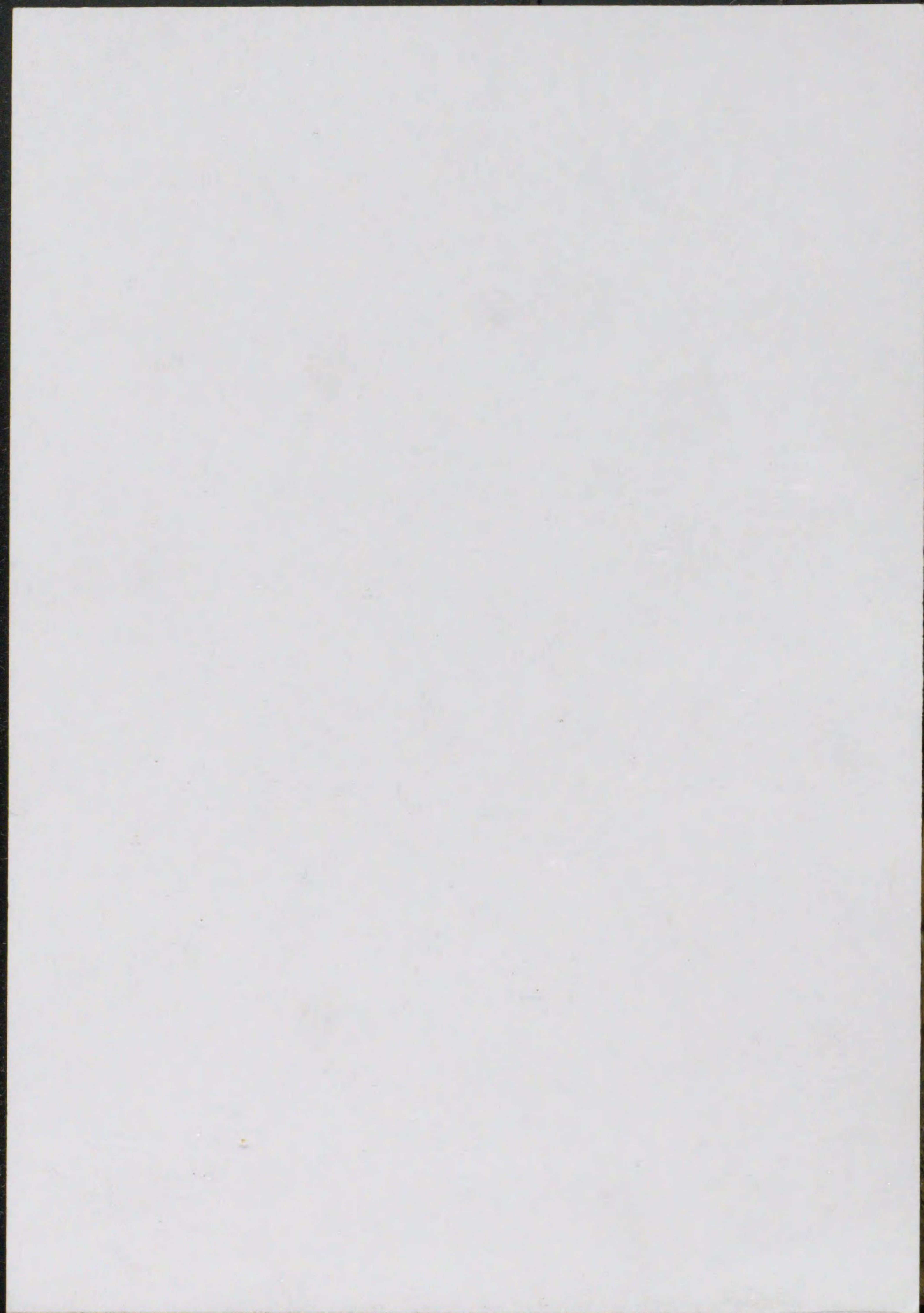
發 兌

京 都 市 大 河 原 町 二 條 下 番

院 書 文 人





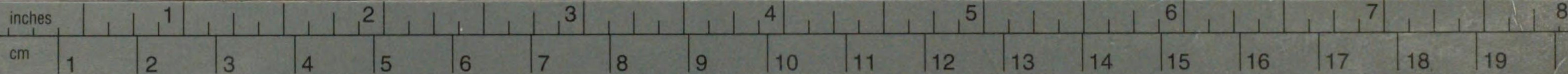


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

